

○○○ 第 31 回学術集会の一般講演応募について ○○○

1. 演 題：ウマに関するものであれば、分野を問いません。原則として先着順に受付けます。
2. 演 者：1 人 1 題。ただし会員に限ります。
3. 講演時間：発表は 7 分以内，討論は 3 分以内です。持ち時間（10 分）を厳守してください。
4. 発表：液晶プロジェクター 1 台（スライドサイズ 4:3）および PC（PowerPoint 2013: Windows 7）を準備します。円滑な進行のため，発表スライドを添付した電子メール（8 Mb 程度まで添付可能），インターネットによる大容量ファイルの無料送付サービスの利用，または発表スライドを保存した電子媒体（CD，USB メモリ等）を 11 月 22 日（木）までに下記学会事務局宛にご送付願います。
5. 講演の申込方法：7. の作成要領に従って MS Word で作成した講演要旨を下記学会事務局宛にご送付願います。

【学会事務局】

日本ウマ科学会事務局

〒 329-0412 栃木県下野市柴 1400-4 JRA 競走馬総合研究所内

Tel: 0285-39-7398

Fax: 0285-44-5676

e-mail: noishida@equinst.go.jp

学術集会担当：石田信繁（JRA 総研 企画調整室）

6. 講演の応募締切：2018 年 9 月 28 日（金）（厳守）

7. 講演要旨作成要領

- 1) 講演要旨の作成には、書式の雛形（日本ウマ科学会 HP よりダウンロード）を使用してください。

（ファイル名の【○○】に演者名を入れてください）

- 2) 雛形の規格

- (1) 用紙サイズ：A4 縦，横書き

- (2) 余白：上下 20 mm，左右 20 mm

- (3) 文字数・行数：本文は 28 行（タイトル，担当者，その下の空白行を含めて 33 行）

※講演要旨【雛形】の Word ファイルは，以下の設定になっております。

「ページレイアウト」－「ページ設定」－「文字数と行数の指定」－「行数だけを指定する」

- (4) 文字の大きさ：演題名は MS ゴシック Century 13 ポイント

演者名は MS 明朝 Century 11 ポイント

所属名は MS 明朝 Century 10 ポイント（所属番号は上付き）

- (5) 本文の字体：MS 明朝。英数字は Century，12 ポイント

ただし，【背景と目的】【材料と方法】【結果】【考察】などは MS ゴシック

- (6) 文字揃え：演題名，講演者名，所属は中央揃え，本文は左揃え

- 3) 発表者の書き方

- (1) 演者名の前には「○」 担当者間は「、」で区切る

- (2) 名前の右上に所属番号を付し，番号に該当する所属を名前の下に記載

例) ○日本太郎¹、東京次郎²、大阪志郎³、福岡吾郎¹

¹ 日本ウマ研究所、² 世界大学ウマ科学部

※所属が 1 ヶ所の場合のみは，右上の所属番号は表記しない。

- 4) 本文の書き方

- (1) 【背景と目的】【材料と方法】【結果】【考察】（後 2 者は【結果と考察】でも構わない）に分けてください。

症例報告やその他の場合については，これに限らず適宜工夫してください。

(2) Macintosh で作成した場合は、Windows で上記の規格に体裁を整えてください。

*氏名と、連絡先の住所、電話番号、メールアドレスを明記してください。

8. 優秀発表賞への応募

一般講演の中から、講演要旨により優秀発表賞候補講演を選抜し、最優秀発表賞ならびに優秀発表賞を審査して表彰します。応募を希望する方は、申込用紙に必要事項を記載し、講演要旨と一緒に提出してください。なお、優秀発表賞候補講演は、学術集会 2 日目（12 月 4 日）の午前の時間帯に行われる予定ですので、この時間帯に発表できることが応募の条件となります。ご不明な点がございましたら、学術担当石田（0285-39-7398）までお問い合わせください。

（申込用紙は、HP よりダウンロードしてください。）

9. 第 31 回日本ウマ科学会学術集会について

会期：2018 年 12 月 3 日（月）～12 月 4 日（火）

会場：KFC Hall & Rooms（国際ファッションセンター）

* 詳細は決まり次第、HP（jses.equinst.go.jp）に掲載致します。

（講演要旨書式の雛形）

1	演題名 （MS ゴチック Century 13 ポイント、中央揃え）
2	（1 行あける、10 ポイント）
3	○演者名 ¹ 、共同研究者 ² 、共同研究者○ MS 明朝 Century11 ポイント、中央揃え
4	¹ 所属 1、 ² 所属 2、○所属○ MS 明朝 Century10 ポイント、中央揃え
5	（1 行あける、10 ポイント）
6	【背景と目的】 （改行）
7	
8	余白は上下左右とも 20mm
9	本文 MS 明朝（英数字は Century）の 12 ポイント
10	本文 28 行（演題、演者名、所属、空白行含めて 33 行）
11	
12	
13	【材料と方法】 （改行）
14	
15	
16	
17	
18	
19	
20	【結果】 （改行）
21	
22	
23	
24	
25	
26	
27	【考察】 （改行）
28	
29	
30	
31	
32	
33	

講演

日本の馬の歴史

楠瀬 良



楠瀬 良（くすのせ りょう）

1951年生まれ。1975年東京大学農学部畜産獣医学科卒業。同大学院等を経て1982年JRA入会。以後、競走馬総合研究所で一貫して馬の行動学研究に従事。また日本ウマ科学会学術担当常任理事、庶務担当常任理事を歴任。現在、（公社）日本装削蹄協会参与、ヒポファイル編集委員長、編集担当常任理事。近刊に『サラブレッドに「心」はあるか』（中公新書ラクレ）。

座長を務めさせていただきます日本装削蹄協会の楠瀬です。どうぞよろしくお願いいたします。

今回のシンポジウムですが、本学会の学術集会30回記念ということで、30回にふさわしい企画を、学会の石田信繁学術担当常務理事を中心に、ヒポファイルの編集委員である全国乗馬倶楽部振興協会の山口洋史さん、それと私とで練りました。日本の馬の過去、現在、未来をテーマにしようということになり、本日も講演いただく多岐にわたる分野の演者に依頼したところ、皆さん快く引き受けていただきました。日本の歴史や風土に根差した多面的な馬の利活用ということで皆さんからお話をいただけるかと思えます。このシンポジウムを通して、日本の馬の将来について、会場の皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

以上が座長としての導入のあいさつですが、ここからは私も演者になり、日本の馬の歴史について、少しお話しをしたいと思います。

釈迦に説法ともいえるのですが、ざっと日本における馬の飼養の歴史について簡単におさらいをします。それをベースに、例えば競走馬ですとか、乗馬、在来馬の今後の利活用について考えるときの基礎知識にしていきたいと思えます。

皆さんよくご存知のように、3世紀末に魏志倭人伝が中国で書かれておりまして、ここには「無牛馬虎豹羊鵲鵲」すなわち（倭の国には）ウマ、ウシ、トラ、ヒョウ、ヒツジ、カササギはいない、と書かれています。

図1がその写本です。単に来日した人が見なかっただけにすぎなくて、こういう記録になったのではないかとことも考えられるのですが、現実には縄文、弥生の時代の遺跡からは、馬の骨は出てきていません。馬にまつわる遺物もないということで、恐らく3世紀

末には日本列島に馬はいなかったのではないかと考えられています。

馬骨やハミの発掘例から、恐らく4世紀末から5世紀にかけて、海を渡って馬飼養や騎馬の文化とともに馬は日本にもたらされたと考えられています。そして、その後の遺跡からは続々と馬に関連する遺物が出土しています。

5世紀末から6世紀初頭に築造されたと推定されている和歌山県の大谷古墳からは立派な鉄製の馬用の兜（かぶと）が出土していますし、群馬県の塚廻り古墳群からは完璧な馬装をした埴輪が出土しています。

また、福岡県の竹原古墳の壁画には海上を輸送中と思われる馬の姿が描かれており、馬を船に乗せて日本に連れてきた様子が描かれていると考えられています。

さて、馬は日本に招来され、いろいろな形で使われたのですが、最初のうちは祭事とかまつりごとに使われておりました。図2はくらべうま（競馬）です。



図1. 魏志倭人伝写本

この絵自体は江戸時代の絵ですが、このくらべうまは奈良時代から行われていたようです。

また馬は交通、運輸、通信などにも使われてきたのですが、日本の歴史を通じて、なんといっても馬の最大の利用目的は戦のための軍馬、すなわち生物兵器としての利用だったといえます。数々の合戦を描いた屏風や絵巻には多くの馬が描かれています。図3は図2と同じ作者である久隅守景が描いた人見四郎図という絵画ですが、「武士道は弓馬の道」ということで、こういう絵も残っています。

徳川時代は約250年間平和が続いたわけですが、その平和な時代でも武士たちは馬を飼い続けて馬術の鍛錬をしていました。

そんな中で、馬を使った競技として流鏑馬や犬追いものといったことも行われていました。これらは戦のための鍛錬の1つともいえます。

もちろん戦のためばかりでなく、平時でも市井の人々の間で馬は使われていました。葛飾北斎なども旅人が馬に乗っている浮世絵や馬市の図など、多くの馬を描いています。ただし人が馬に騎乗できる場所は決められており、馬に荷車を引かせることも禁止されていたようです。それだけ、為政者は馬の力とスピードを警戒していたものと考えられます。

明治時代に入りますが、日本の馬は軍馬としてはあまり評判がよくありませんでした。維新後ほどなくし

て日清、日露戦争があり、戦場に馬は連れられて行きましたが、日本の馬は小格なうえにとっても落ち着きがない。評判が悪いというか、ボロクソな評価のようでした。馬を御す技術、去勢の技術、その他さまざまな技術が列強に比べ未熟で、時の政府は日本の馬をどうにかしなくてはいけないと考えました。

そこで日本は、馬政計画というものを立案し、いろんな面から日本の馬そのもの、馬の飼養環境を改善していこうとしたのですが、最も重要視したのは馬の育種改良でした。育種改良では、日本の在来馬に洋種を交配して、少しでも大型にするということを打ち出したわけですから。

具体的には1906年に馬政第一次計画が開始されたのですが、この時代は在来馬が120万頭ぐらいいたわけですね。日本に元々いた馬たちです。それがどんどん洋種に交配されて、雑種が増え純粋な在来馬がどんどん減ってくるということで、最終的に1935年には在来馬は数万頭か、もっと少ない数になってしまいました（図4）。この時期こそが日本で飼養されている馬の

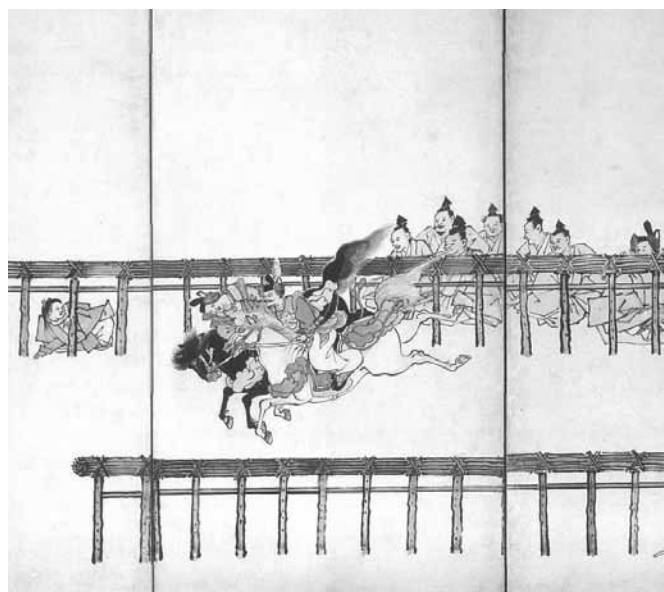


図2. 賀茂の競馬図屏風（部分）（馬の博物館蔵）



図3. 人見四郎図（部分）（馬の博物館蔵）

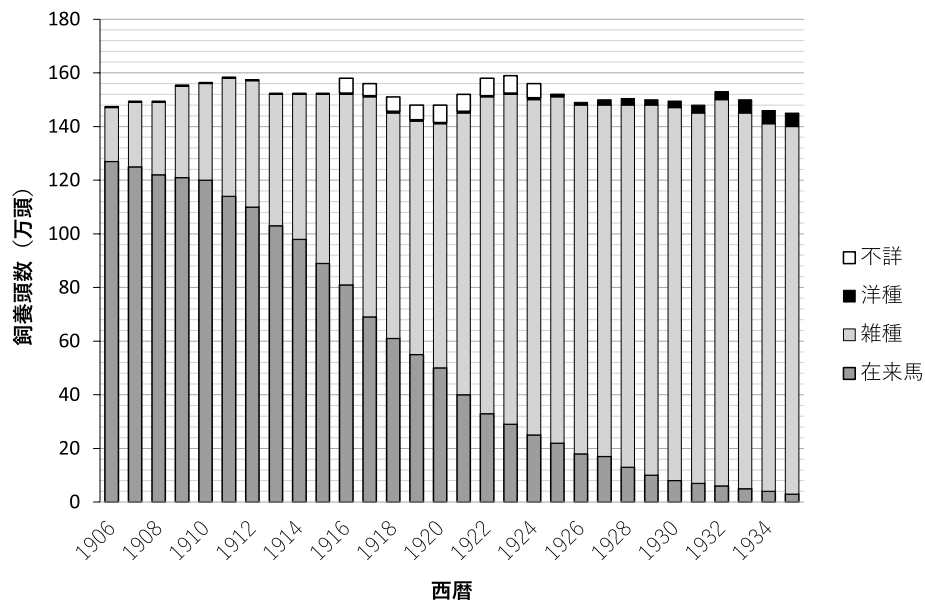


図4. 馬政計画の進展による日本の馬飼養頭数の変化

大きな変換点になった時代と言っても構わないと思います。

各種の兵器が発達した第二次世界大戦になっても、馬はそれなりに重要でした。中国戦線や南方に多くの軍馬が投入されました。ただし戦場に送られた馬のほとんどすべては、日本に二度と戻ることはありませんでした。

戦争が終わっても、今に比べればそれなりの数の馬が日本には飼われており、農耕や市民生活で使われていました。戦後の一時期、馬の最大のオーナーは日本

通運だったと言われております。しかし、モータリゼーションの発展により馬の数は急減し、明治時代あるいは大正と、ずっと150万頭前後いた日本の馬ですが、今日では7万頭に欠ける数になってしまいました。その辺のことについては、次の演者の荒川さんがいろいろとお話をしてくれると思います。

以上が、ざっとおさらいした日本の馬の使用の歴史ということです。それでは荒川さん、よろしくお願いします。

講演

日本における馬の利活用

荒川由紀子



荒川由紀子（あらかわ ゆきこ）
農林水産省畜産部所属。麻布大学動物応用科学科大学院修了（馬の睡眠脳波にみるストレス測定の検証）。平成13年～（独）家畜改良センターで牛の繁殖技術、馬（重種馬）の改良増殖、牽引力能力研究などの現場業務に従事。平成21年～農林水産省畜産振興課馬係長、平成25年～競馬監督課馬産地係長、平成30年～畜産振興課事業企画係長。

農林水産省競馬監督課の荒川由紀子と申します。よろしくお願ひします。本日のお話に入る前に少し私と馬について自己紹介をさせていただきたいと思ひます。

私は物心がつく前から馬が好きで、近所の小さな遊園地に行くとき必ず引き馬をおねだりするような子どもでした。毎年近所の八幡神社の流鏑馬を見るのが楽しみで、颯爽と馬が走って行く姿にずっと憧れていました。中学生の時に保健所を退職した叔父が乗馬クラブを始めたのをきっかけに本格的に馬と関わるようになりました。大学生の時は、乗馬クラブで手伝いながら馬に乗せてもらっていて、研究室では「日本在来馬（木曾馬）を障害者乗馬にする」というプロジェクトで、その馬の調教を担当していました。

今は霞が関で事務的な仕事をしているのですが、北海道の十勝牧場時代には重種馬の繁殖・生産に携わり、直腸検査や種牡馬の採精、分娩や放牧監視など、まさに現場の仕事をしていました。

プライベートでもさまざまな馬に乗ったり、調教したり、海外にも乗りに行ったりと、日本在来馬から重種馬、競走引退馬などさまざまな種類の馬に関わることができたこと、また、生産現場から乗馬や競馬など幅広い分野に関わってこられたことは、非常に貴重な経験であり、恵まれていたと思っています。

本日のタイトル「馬をめぐる情勢、日本における馬の利活用」ということで、馬の頭数など統計的なデータに基づくものを中心にお話させていただきます。ここに示すグラフは正確な数字というよりは大きな変化を見るものと理解していただきたいと思います。また、家畜改良増殖法や競馬法といった、法律では馬の改良増殖という観点がありますし、近年では、農福連携など農業分野と福祉や教育など他の分野との連携を強めていくというような観点も注目されてきています。

日本人と馬の関わりについては、楠瀬先生がお話しになったとおりで、昔から馬は農村でも町でも戦時でも平和な時も、人の側でさまざまな役割を果たし、人の生活に密着しながら生きてきました。日本人の生活の中に馬が根付き、これが千何百年も続いて、まさに日本の歴史・文化は馬とともに築かれてきたと言っても過言ではないと思ひます。

私の知る限り、我が国全体の馬の総飼養頭数に関する資料は、明治の「馬政統計」からで、明治10年にはおおよそ125万頭の馬がいました。

明治時代から昭和初期にかけては、おおよそ150万頭でほぼ横ばいで推移しています。しかし、その内訳については、先ほど楠瀬先生がお話しされたとおり、最初は在来馬だったものがどんどん洋種化されていったという時代でありました（図1）。

次に、昭和初期から昭和後期までの間は、昭和元年に149万頭いた馬が終戦の昭和20年には112万頭に減り、昭和50年には11万頭ということで、ここの30年

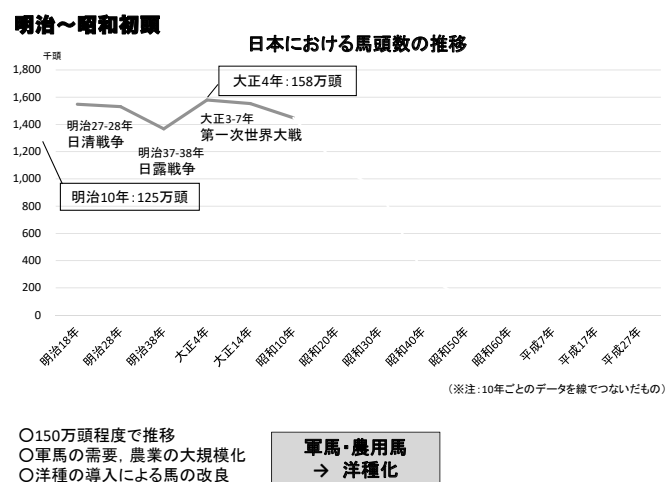


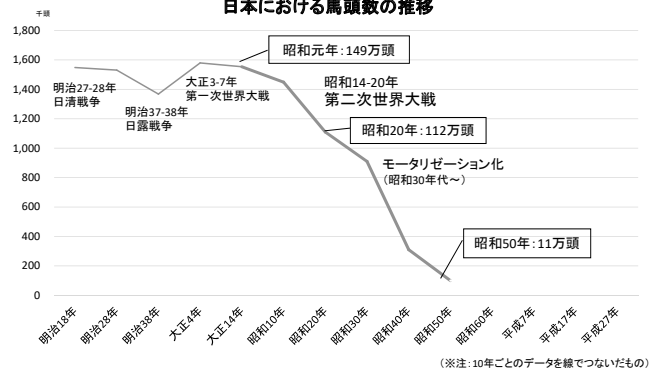
図1.

間で10分の1にまで激減しています（図2）。それまで馬は、運送や農耕、軍事用などの動力として非常に重要な役割を担っていましたが、モータリゼーションの普及や、馬の堆肥が化学肥料の普及により取って代わるなど、馬の必要性が少なくなり、それに伴って馬の飼養頭数が激減した時代になっています。

その後、昭和50年以降競馬ブームが起こり、競走用馬が少しずつ増えることにより、馬の総飼養頭数の減少にも歯止めがかかりました（図3）。ハイセイコーやオグリキャップなどの有名馬が流行歌になったり、競馬ゲームが流行するなど、これまで競馬をやらない人や女性や子どもでも有名競走馬の名前は知っているなど、競馬は国民的な娯楽として定着してきました。

昭和初期～昭和後期

日本における馬頭数の推移



- 戦争における軍馬の需要の減少
- 急速なモータリゼーション化
- 化学肥料の普及

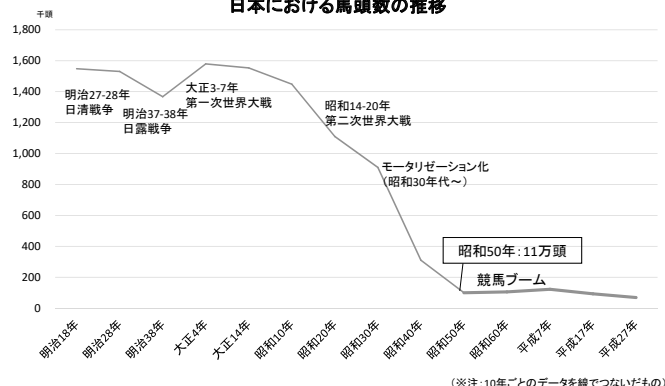
⇒ 軍事・農耕・運送における馬の必要性の低下

⇒ 馬の飼養頭数の激減

図2.

昭和後期～

日本における馬頭数の推移



- 競馬ブーム → 国民的娯楽として定着

競走馬(アラブ・サラブレッド)の生産が増加

図3.

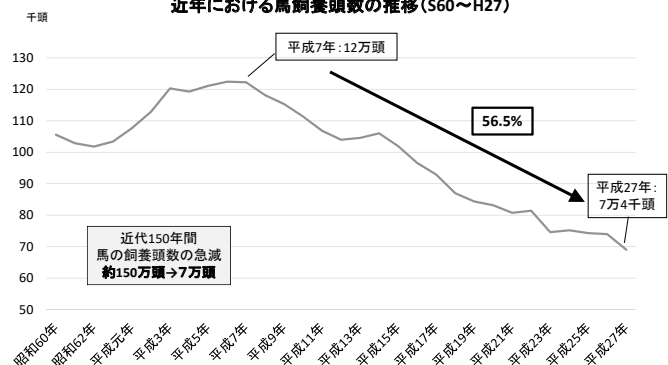
競馬の盛り上がりとともに一時期は少し増加傾向に転じた馬の頭数ですが、今はまた減少傾向で推移しています。

近年における馬飼養頭数の推移について説明させていただきます（図4）。昭和60年から平成27年までの推移について少し拡大したグラフになります。平成6年の12万頭をピークとして減少傾向で推移し、平成27年時点ではおよそ7万頭となっています。平成6年から20年あまりの間に、日本に飼養されている馬の頭数が約半減しているという事実があります。

馬の頭数が減るということは、直接的に馬の生産者や飼養管理者が減るというだけでなく、馬に関する産業全体、例えば装蹄師や獣医師、餌屋さんや馬具屋さんなども需要と供給のバランスということで縮小せざるを得ない状況になります。また、馬に関わる人や産業が縮小することで、知識や技術、文化が失われていく危険性もあります。

では近年の馬頭数の減少のうち、馬の種類・用途によってどのように違いがあるのか（図5）見てみます。青い線が軽種馬ですが、軽種馬は平成4年がピークで、7万頭いたものが平成25年には4万頭に減り、25年間で3万2千頭減少しています。農用馬についても、平成3年に3万頭いたものが、平成25年現在6千頭まで減少しています。25年間で2.4万頭と絶対数の減少は軽種馬より少ないものの、3万頭に比べて6千頭と5分の1にまで減っているという状況になっています。日本在来馬は、このグラフで見るとほぼ横ばいですが、軽種馬や農用馬と同様に、平成6年の3千5百頭をピー

近年における馬飼養頭数の推移(S60～H27)



- 現在、約7万頭(H27時点)
- 20年間で56.5%減少。
- 現在も減少傾向は続いている。

⇒ 馬の頭数の減少
⇒ 馬に関連する産業全体の縮小
(技術者、関係者も減少)

図4.

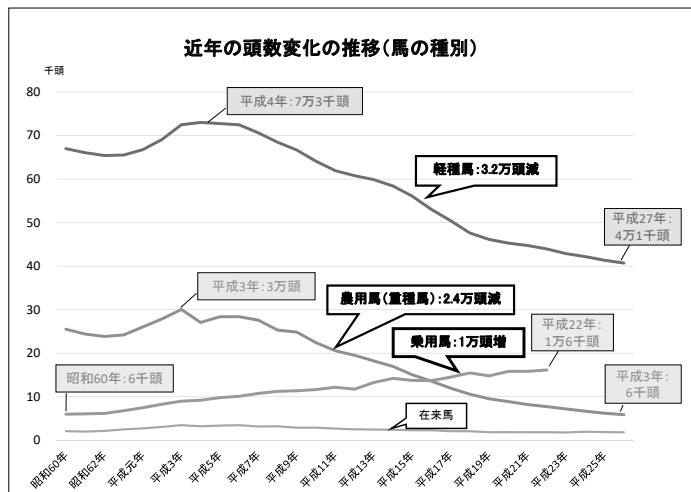


図 5.

クにその後減少して、平成 27 年現在千 8 百頭まで減少しています。

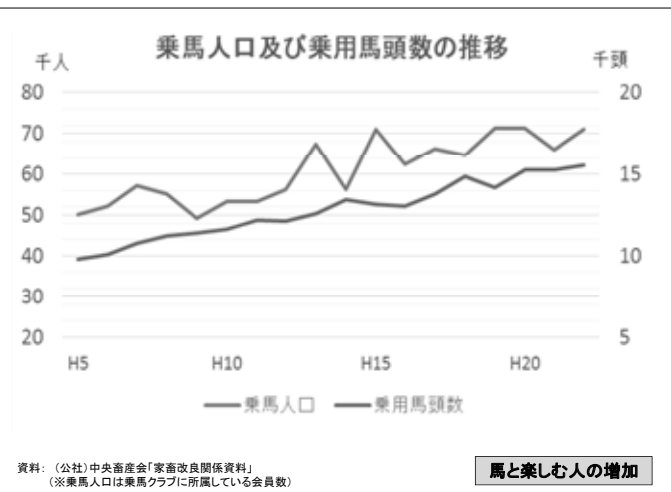
このような中、唯一増加傾向で推移しているのが乗用馬で、昭和 60 年に 6 千頭だったものが平成 22 年で 1 万 6 千頭と、25 年で 1 万頭とわずかずつではありまますが確実に増加してきているという状況です。

では、乗用馬が増加しているのはなぜかという、乗馬人口の増加に伴うものと思われます。ここでの乗馬人口は、乗馬クラブに所属している会員数ということですが、昭和 60 年に（ここには載っていないのですが）1 万 6 千人であったのが、平成 5 年には 5 万人、平成 22 年には 7 万人という形で増加しています。それに対応するように、馬の頭数は、昭和 60 年に 6 千頭、平成 5 年に 1 万頭、平成 22 年度に 1 万 5 千頭と平行して増加しています（図 6）。

さてここで少し、日本の馬の頭数 7 万頭という数字が、ほかの家畜などと比べてどうなのかということをお話したいと思います。

まず、日本の人口が 1 億 3 千万人ほどです。身近なペットである犬猫は、犬が 991 万頭、猫が 987 万頭で、合わせて 1,980 万頭です。同じ大型草食の家畜として、牛は肉用牛・乳用牛あわせて 382 万頭います。それに比べて、馬はわずかに 7 万頭しかいません。

それでは、世界はどうなのでしょう。人口に対する馬の頭数、これを割るのも変なのですが、日本の場合 1,800 人に対して馬 1 頭ぐらいの割合です。乗馬先進国であるイギリスやフランスでは馬の飼養頭数が 40 万頭ぐらいで、160 人に対して馬 1 頭程度です。アメリカは、馬も 1 千万頭もいて、32 人に対して馬 1 頭と



資料: (公社)中央畜産会「家畜改良関係資料」
(※乗馬人口は乗馬クラブに所属している会員数)

馬と楽しむ人の増加

図 6.

いう計算になります。日本は国土が狭いことが影響しているのではないかとも思い、広さの違いも調べてみました。もちろんアメリカは全然桁が違いますが、イギリス、フランスと日本はそんなに差はないのかなという感じです（表 1）。

このようにみると、現在の日本において、馬という動物が人口に対する割合も面積に対する割合も少なく、「身近な動物」とは言いがたい状況になっていると言わざるを得ません。

しかし、馬は家畜ですので、人の生活にとって求められる役割や用途というものがないければ、頭数の減少は避けられません。馬の求められる役割や用途という、いま圧倒的に日本の国内でシェアを占めているのは競馬です。昨日のジャパンカップでも入場人員が 10 万 8 千人と、本当にたくさんの人々が馬という生き物に関われる場ということで、競馬は提供していると思います。そのほか、2020 年には東京オリンピック・パラリンピックがありますが、馬術競技もたくさんの方が観戦することでしょう。また馬術競技に参加する方や、趣味として乗馬を楽しまれている方もたくさんいます。また近年では、障がい者乗馬やホースセラピーの取り組みや、教育活動の中での取り組みも増えてきています。また、全国各地の伝統行事やイベントで馬が使われているものもたくさんあります。それを観光資源として集客し、地域振興に役立てている事例もあります。

ただ、これらの教育であったり、ホースセラピーであったり、観光資源としての地域振興であったりといった形での馬の利活用というのは、それぞれに個々

表 1.

○ 日本における身近な動物の飼養頭数比較

	人口	犬	猫	乳用牛	肉用牛	馬
日本	1 億 2,700 万人	991 万頭	987 万頭	134 万頭	248 万頭	7 万頭
		1,980 万頭		382 万頭		

○ 世界の馬の飼養頭数の比較

	人口	馬の飼養頭数	何人につき馬 1 頭？	国土面積
日本	1 億 2,700 万人	7 万頭	馬 1 頭／1,800 人	38 万 km ²
イギリス	6,500 万人	40 万頭	馬 1 頭／160 人	24 万 km ²
フランス	6,500 万人	41 万頭		55 万 km ²
アメリカ	3 億 2,300 万人	1,000 万頭	馬 1 頭／32 人	980 万 km ²

馬の求められる役割や用途 ⇒ 多様



図 7.

の素晴らしい活動が行われているものの、なかなか全国的には知られていないというような状況があります (図 7)。

農林水産省では、省庁連携・農福連携という形で、農業の活性化を図ることにも取り組んでいます。

平成 26 年から 3 年間、ホースセラピーや教育、地域振興などの馬の多様な利活用の事例を調査・収集する事業を JRA 畜産振興事業の支援をいただき、全国乗馬倶楽部振興協会で行っていただきました。本日、その事例集を皆様にお配りさせていただいておりますが、是非、このような取組を皆様に知っていただき、「馬はこんな活用もできるんだ」「こんな風にしたらうまくいくんだ」というような参考にさせていただいたら、大変幸いです。

馬の多様な利活用を推進するための課題は、関係す

馬の多様な利活用
乗馬や馬とのふれあい等による、畜産と福祉・医療、観光等との連携の推進
現状:NPO、乗馬クラブ、地域行政等の単独取組み

関係先が多分野にわたる。
情報共有を図り、相互連携して推進。

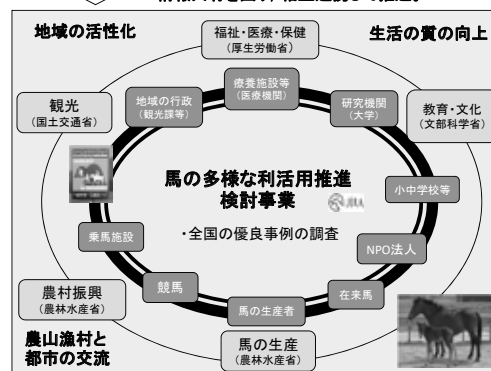


図 8.

る分野が、厚生労働省管轄の福祉医療関係、文部科学省の教育文化関係、国土交通省の観光関係、農村振興関係、馬の生産関係、乗馬施設、地域行政、医療機関、大学などの研究機関、競馬など幅広いところにあります。それぞれの分野が「馬」というキーワードの下に横のつながりを持つことが重要と考えております (図 8)。

馬は、先ほどから言っているように、求められる役割、用途というものがなければ、なかなか生きていくことができません。馬 1 頭を飼養管理するためには、お金も手間も場所も必要になります。

現在日本では少子高齢化や、福祉社会、地域活性化、ネット社会、ストレス社会というような課題があります。その中で、例えば高齢者や障がい者の健康維持・促進の乗馬や馬との触れ合い、また野外や自然の中で

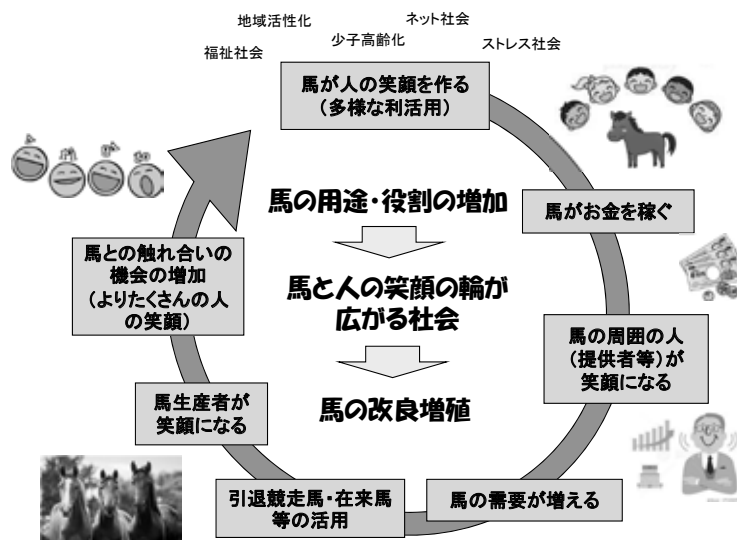


図 9.

馬と活動することによるストレス解消や癒し、1人っ子でも馬を介した活動をする中で年上や年下の子どもたちとの関係を体験できる、馬の祭りなどを核として活動することによって地域の結束ができたり、それを観光資源とすることによる地域経済の振興など、現代の日本だからこそ、社会の課題解決のため、生活の質の向上のための馬の役割、利活用方法もあるのではないのでしょうか。

馬の多様な利活用によって馬が人の笑顔をつくることができれば、それによって馬でお金を稼ぐことができ、馬を持続的に飼養管理することができるようになり、それによってその馬を飼養管理する周囲の人も笑顔になります。馬の需要が増えることによって、馬の

生産振興が図られ、また引退競走馬や在来馬の活用という機会も増えてきます。安定的に良質な馬が提供される形になると、もっとたくさんの人たちが馬と触れ合うことができるようになり、馬と人の笑顔の輪がどんどん広がる社会が増えて、馬も人もどちらもハッピーになる日本の社会になっていくのではないかと願っております（図9）。

かつての私がそうであったように、身近に馬と関わる経験があることで「馬好きな人」を増やすことが、未来の馬の振興にとって重要なことであり、このような世の中になっていくことを祈念して、わたしの講演とさせていただきます。

講演

日本在来馬の現在・未来

藤田知己



藤田知己（ふじた ともみ）

1957年、和歌山県生れ。1980年、岩手大学農学部畜産学科卒業。乗馬クラブで10数年間勤務した後、社団法人全国乗馬倶楽部振興協会に就職。現在は、普及部長として乗馬クラブの安定経営化や乗馬の普及活動に精力的に従事。特に乗馬の普及を推進するには、日本人に合った内国産乗馬の生産こそが要とのポリシーから、生産体制の整備と、内国産馬の普及に意欲的に取り組んでいる。

皆さん、こんにちは。公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会の藤田と申します。楠瀬先生、それから荒川さんのいまのお話、具体的な数字などを示されて、非常に学術的なお話でした。わたしの在来馬に関するお話は、ここ十数年、わたしが現場で在来馬と関わらせていただいた体験（経験）でございますので、学術的なものはかけらもございません。どうぞリラックスしてお聞きいただけたらと思います。

本日準備しました資料ですが、普通は大体60分、ゆっくりやって90分かかりますが、それを15分でやれという素晴らしい指導がございまして、走ってまいります。それでは、早速始めさせていただきます。

図1は、いま沖縄で復活いたしました（昭和2年から途絶えていた）、地域の馬を使ったウマハラシーという琉球競馬を復活させた1つの例です。活用されている馬は、与那国馬です。次に、日本在来馬についてですが、ここにおられるほとんどの皆様がご存じかと



図1.

思います。いま現在、8馬種が残っております（図2）。北海道和種馬、長野県・岐阜県の本曾馬、それから四国の今治市に野間馬がおります。また長崎の対馬には対州馬がおります。宮崎県には御崎馬。それから、トカラ列島（奄美大島から鹿児島島の間に有人の島が7島あります）の中の中之島にトカラ馬が残っております。沖縄に参りまして宮古馬、与那国馬。以上の8馬種が現在残っている日本在来馬たちです。

在来馬の現状（図3）についてです。北海道和種馬が1,200頭、本曾馬100頭、野間馬57頭、御崎馬120頭、トカラ馬110頭、与那国馬が100頭、対州馬40頭、宮古馬が36頭と、概ね合計で1,800頭前後です。育種繁殖学上、将来に残していくということで考えれば、北海道和種馬がいちばん問題はないと思います。野間馬、対州馬宮古馬あたりは非常に危ないかなと。これらは何かあったら即いなくなってしまうというくらいの危機的状況にあります。

日本在来馬

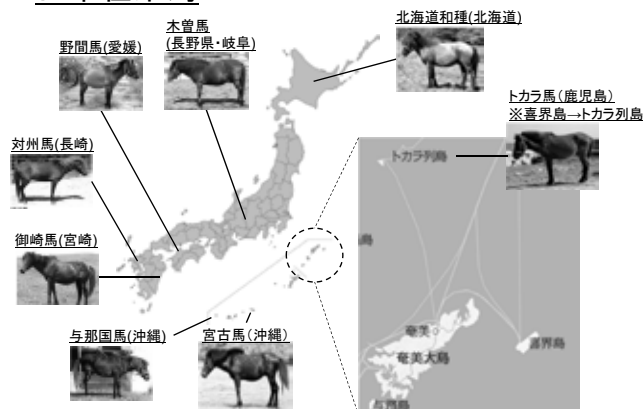


図2.

日本在来馬の現状について

〈保存馬種と頭数〉

・北海道和種馬(ドサンコ)	……1,200頭
・木曽馬	……100頭
・野間馬	……57頭
・御崎馬	……120頭
・トカラ馬	……110頭
・与那国馬	……100頭
・対州馬	……40頭
・宮古馬	……36頭
総計: * 1,800頭	

図 3.

鹿児島大学入来牧場のトカラ馬群



図 4.

図 4 が、鹿児島大学入来牧場のトカラ馬群です。非常に猛々しい性格で、入来牧場という山の中で保存されています。

現在、公設の動物園においても、在来馬が活用され始めています。上野動物園には与那国馬、トカラ馬、野間馬、木曽馬がいます。佐世保の動物園には対州馬がおり、副次集団として繁殖に取り組んでいます。沖縄こどもの国には与那国馬がいます。ここではいま琉球列島の在来馬を集めて、琉球列島の中でやはりその地域に合った活用をしていこうというような取り組みが行われています。

民間の乗馬クラブでも、与那国馬、トカラ馬が現在使われ始めており、図 5 のように活用されています。

民間の乗馬クラブ等における活用事例

・ヨナグニ馬

上村乗馬苑(鹿児島県)・明石乗馬協会(兵庫県)
リゾート大島(和歌山県)・旭ライディングF(愛知県)
・もとぶ元気村(沖縄県)・久米島馬牧場(沖縄県)

・トカラ馬

(公財) ハーモニイセンター(東京都)
(社) 奄美共生園(鹿児島県)
久米島馬牧場(沖縄県)

図 5.

ここからは、1 馬種ずつ、その馬の特徴をみていきしたいと思います。

最初は、与那国馬(図 6)です。与那国馬は、非常に温厚な性格をしています。人間との活動を好む馬であるという印象を持っています。ところが、保存されている牧野に草が乏しいものですから、背中が非常にとがってしまっています。体力的にちょっと物足りなさがあると感じています。

ですから、活用するのに、手間と時間がかかります。恐らく活用できるまでの調教ということであれば、3 ヶ月あれば十分だと思います。ところが体力を回復させるために7 ヶ月以上かかるというのが現状で、合わせると1 年もかかるのです。

与那国馬の保存状況ですが、100 頭程度が半野生状態で保存されています。故に、やはり栄養状態に問題があるかなと思います。

それから与那国馬を使いたいという方は大勢いらっしゃると思うのですが、出してくるのが大変です。与那国島から出そうと思いましたが、沖縄本島までフェリーは走っておりません。貨物船しか走っていません。ですから、まず馬をコンテナに入れて、無人で本土まで輸送してこなければならない。途中で何かあったら、1 週間、2 週間、もしかしたらそれ以上船の中に置いておかななければならないという問題があります。

ですから、無事に本土に輸送できる保証はなかなかないわけです。わたしも十数頭輸送しましたが、2 回ほど船便が飛びまして、もう青くなった経験があります(図 7)。

図8は宮古馬です。宮古馬は、性格的には非常に温和です。親和性にも富むと思います。宮古馬の保存会から、調教の指導をしてもらいたいということで呼んでいただいたのは1回だけです。それ以上の調教に関わっておりませんので、運動性能というのはわたしからは何とも申し上げられないのですが、性格的に親和性に富むところからみれば、運動性能も高いのだろうという感じは持っております。

先ほどもお伝えしましたが、頭数はいま36頭です。これをどのように増やしていくか。それから、外部との連携による宮古馬に関する認知向上が必要だというように感じています(図9)。

図10はトカラ馬です。いま、子どもたちが乗って遊

んでくれています。これはトカラ列島の宝島にいる馬です。この子たちは兄弟なのですが、生後7ヵ月から、この子たちの手によって育てられました。鞍付けもこの子たちがほとんどやってくれました。一部、わたしが手伝いに行ったのですが、ほとんどこの子たちの手で育てて、ここまで乗れるようになりました。

トカラ馬は持久力に富みます。家畜化の初期段階では、馴致の知識がなければ付き合えない馬です。強烈です。やはり山から下りてきたばかりの馬というのは、もう半野生の状態ですから猛獣です。蹴る、飛び掛かってくる、こんなのは当たり前です。

この馬と、家畜としてつき合っていくには、ある程度の時間が必要です。人とともに生活するルール、マ



図6.

与那国馬の活用事情に関するあれこれ!!

・与那国馬の特徴

性格温和・人間との活動を好む・背中が尖がっている・体力不足の感あり。

・与那国馬の保存状況

100頭程度が半野生状態で保存されている。
栄養状態に問題あり⇒体力不足に繋がっている?
外部での活用に大きな広がりが見られる状況。

・与那国馬の将来的課題

保存段階における飼養管理面の改善。
外部への輸送の簡素化。

図7.



図8.

宮古馬の活用事情に関するあれこれ!!

・宮古馬の特性

温和・親和性に富む・運動性能は不明。

・宮古馬の保存状況

30頭強の保存頭数・活用は地域内のみで限定的。

・宮古馬の将来的課題

まずは増頭を如何に果すか?!
外部との連携による宮古馬に関する認知向上

図9.



図 10.

トカラ馬の活用事情に関するあれこれ!!

・トカラ馬の特徴

持久力に富む・家畜化の初期段階では正しい馴致の知識が無ければ付き合えない馬。人間との良好な関係が確立されれば素晴らしい能力を発揮する。

・トカラ馬の保存状況

半野生状態で開聞岳、入来の各牧場で併せて100頭強、トカラ列島中ノ島に20頭程度が保存されている。

・トカラ馬の将来的課題

初期馴致が出来る技術者との連携強化。

図 11.

ナーを教えていくだけの技術と時間が必要です。これができる施設にうまく入れれば、この馬は非常に使い勝手がよくなってきます。体力もあります。そして、機動性がものすごくいいのです。乗っても軽い馬です(図 11)。

図 12 が対州馬です。対州馬は見てのとおり、乗用馬としては一級品です。素晴らしいです。びっくりします。九州のある馬場の競技会で、下のほうのクラスですけれども、転用された競走馬をそっちのけにして、この馬は優勝したこともあります。非常に運動性能が高いのです。

現状としては、やはり育種繁殖上の危険水域にあることは、もう間違いありません。いま、行われている牧馬繁殖(これは非常に古典的な繁殖方法)が、わた



図 12.

対州馬の活用事情に関するあれこれ!!

・対州馬の特徴

ふれあいレベルから初級競技クラスを対象とした「乗用馬」として見た場合は一級品!!

・対州馬の保存状況

現状は40頭という育種・繁殖学上の危険水域、牧馬繁殖により増頭の可能性が膨らみつつあるが・・・。

・対州馬の将来的課題

育種繁殖学上の危険水域からの脱却、増頭による市の財政負担を軽減させる保存方針の確立。⇒馬の販売やレンタルによる経済活動を確立させる。

図 13.

しが関わらせていただいていた中では最良の方法で、毎年数頭ずつでも増やしていくには、対馬の現状ではこの方法がいちばん良い方法かなと思っています。

将来的な課題としては、とにかく50頭、80頭、その辺までいかないことには、繁殖学上の危険水域から抜け出すことは難しいと思っています。

それから、地域環境から、馬を増やすことで市の財政が逼迫し、餌代がなかなか持ちきれないというような現状があります。やはり馬のレンタルや販売が必要ではないでしょうか。レンタルホースとして各地域に貸し出し、その代金をいただいて、餌代にするというような工夫をしないことには、増やしていこうという機運が高まってこないのではないかと感じています(図 13)。

図 14 が、野間馬です。今治は橋の町で、来島海峡大橋とかいろいろな橋があります。それを模して、こういうようなことをお客さんの前でアトラクションとしてやっております。この高さを見てください。在来馬ですが、これだけの高さを跳びます。これだけの高さを跳ぶ能力を持っています。これは結構高いですよ。1 m 20 cm ぐらいはあると思います。それぐらいでも跳んでいきます。非常に運動能力の高い種類だなと感じています。

いま話題になっております加計学園の獣医学部と恐らく来年あたりから連携し、ここが実習場になるのではというような話も聞こえております。

野間馬は本当に賢いです。人との近い距離の中で管理されているので栄養状態がよく、背中が丸いのです。背中が丸いというのは、鞍が付けやすい。鞍を付けても背中に対するダメージがないので、鞍付けも非常に簡単です。軽快で運動性に富みます。ピーク時は 84 頭ぐらいまで増えたのですが、やはり高齢化と出産直後に死んでしまうというようなことが重なり、60 頭弱まで減少しました。これを何とか増やしていく必要があります。何としても、これ以上は頭数を減らさない。より高いレベルの調教をして、地域での活動を推進していく。これらが、これからの課題かなと思っています（図 15）。

図 16 は北海道和種馬です。

これは、東北・北海道で盛んになってきた、スポーツ流鏑馬の 1 コマです。この馬種は、在来馬の中ではやや大型で側対歩が特徴です。1,200 頭と最大の保存頭数です。ですから、保存ということに関しては、いちばん心配のない馬種だと認識しています。活用の方向性を明確にした保存活動と、側対歩の問題ですね。南の馬たちには、側対歩は見られません。北海道和種馬は側対歩であるが故に、子どもたちが乗った時に駈歩が下手で動かないということが、問題点なのです。

新潟県の粟島浦村が経営している牧場を、わたしはいま、いろんな形でバックアップさせていただいています。そこには北海道和種馬と、それに類するような馬ばかりが 10 頭ほどがいます。そこでは、いちばん上手な子を側対歩の馬に乗せなきゃならないのです。これはつらいです。いちばん上手な子を、もっともっと上手にしてやりたいのですが、いちばん上手な子でないと側対歩の馬は動かないのです。ですから、いちば

地域イベントで複数のアトラクションを披露出来るまでになった野間馬



図 14.

野間馬の活用事情に関するあれこれ!!

・野間馬の特性

賢い・背中が丸く乗り易い・軽快で運動性に富む

・野間馬の保存状況

保存頭数は 60 頭弱と減少傾向。

人間との距離が程良い中で保存されており、人馬のコミュニケーション作りが実行しやすい。

外部での活用にも広がりが見え始めている。

・野間馬の将来的課題

これ以上頭数を減少させない。より高いレベルの調教。

図 15.

ん上手な子を側対歩の馬に乗せるのです。「おまえ、上手だからごめん。これに乗って」というようなことでやっています。非常につらいところがあるので、側対歩ではない北海道和種馬をいかに供給していただくかというようなことも、今後の課題ではないかなと思います。

北海道和種馬の保存会の皆さんがいらっしゃいましたら、保存のほうは側対歩の馬を保存していただいて、側対歩ではない馬を乗馬のほうに供給していただくような体制をお願いしたいと思います（図 17）。

木曾馬は写真がございません。残念ながらわたしども、ここ 13 年の間で呼んでいただけないものですから。ここには、中川さんという素晴らしい技術者がおられます。ですから、わたしどもにはお声が掛からなかつ



図 16.

北海道和種の活用事情に関するあれこれ!!

・北海道和種の特徴

在来馬の中では大型・側対歩が特徴

・北海道和種の保存状況

1200頭程度と最大の保存頭数。

乗馬クラブなどでも普通に見かける種類!!

・北海道和種の将来的課題

活用の方向性を明確にした保存活動。

(側対歩でない馬の供給確立とその為の馴致行為等)

図 17.

木曽馬

・木曽馬の里 木曽馬乗馬センター

長野県木曽郡木曽町開田高原

・木曽馬乗馬・木曽馬での園内馬車遊覧
等で活用されている。

・乗馬クラブ等外部での活用もみられる。

図 18.

御崎馬

・都井岬の景観(国は馬も景観の一部という認識)として国の特別天然記念物に指定。

天然記念物であるが故に乗用馬として一般的に活用することは不可。

図 19.

番外編:この馬も在来馬ですが・・・。



図 20.

たのではないかなと思うのです。中川さんから活動が非常に進んでいるよというお話は聞いていますので、木曽馬の活用を今後も着実に進めていただけたと思います(図18)。

それから、御崎馬。これはもう皆さんご存じのとおり、特別天然記念物です。これを活用なんて言ったら、お手が後ろに回りますので、これは何もしておりません(図19)。

それから番外編(図20)です。この馬も在来馬です。日本にはいま8種類と言ってまいりましたが、これはお隣の国韓国の在来馬です。韓国は済州島の済州馬です。

濟州馬の活用事情に関するあれこれ

- ・濟州島は国から「馬特区」の指定を受けている。
- ・純粋な濟州馬が1万頭程度保存されている。
- ・競走馬や乗用馬として活用する為に交雑を実施。
(交雑はサラブレッド・クォーターホース等と実施)
- ・交雑種は2万頭規模で繋養されている。
- ・純粋種は保存の為、活用は交雑種という明確な方針が示されている。

図 21.

いま濟州島は、国から馬特区に指定されています。

そこには純粋な馬が1万頭います。他に交雑種が2万頭、計3万頭の濟州馬がいます。日本では禁句になっていますが、向こうでは、保存は純粋種を保存し、活用はサラブレッドやクォーターホースと交雑させてF1をつくって、そのF1を活用するという明確な方針で行

まとめ

希少性と話題性に富む在来馬達、これらには今の時代だからこそ活用のステージが沢山存在します。

馬に関するお仕事をされている皆様方、また馬に興味をお持ちの皆様方には日本在来馬の存在と現状につきましてご理解いただきますと共に、活用に関しますアドバイス等を頂戴できれば幸いです。

今後、在来馬達が全国各地で活躍してくれる事を願いつつ終りにしたいと思います。

本日はありがとうございました！！

図 22.

われています。今後の日本の在来馬の未来を考える時に、お隣の国の事例が1つの参考になるのではと考えています（図 21）。

図 22 は、本日のまとめです。本当にとりとめのない話でしたが、どうにか15分でまとめることができました。ご静聴ありがとうございました。

講演

内国産乗用馬の現在・未来

山下大輔



山下大輔（やました だいすけ）

日本大学法学部を卒業。日本馬事協会に就職し、それ以来業務部にて乗用馬を始め、農用馬、在来馬の生産振興に従事している。

公益社団法人日本馬事協会の山下と申します。よろしくお願ひいたします。それでは、わたしのほうから、内国産乗用馬の生産の現在と未来についてということとで説明をさせていただきます。

まず、乗用馬の生産地の主な分布（図1）ですが、北海道および岩手が、10年以上前から生産を行っている地域になります。この地域は、昔の軽種馬のアングロアラブと Trotter を生産していた北海道の道東地区と岩手県でも昔からの馬産地である遠野市が生産をしていた地域です。

他の濃いグレーのところににつきましては、この直近10年で乗用馬の生産が恒常的に行われている地区をマーキングしています。この背景としては、サラブレッドの転用馬が入手しにくくなったことから、自分たちの使用する馬を自分たちで生産するため、主に郊外型の乗馬クラブが自ら生産を始めたのです。

続いて、生産頭数と登録頭数の推移です（図2）。ご覧になってわかるように、先ほど農林水産省荒川氏の説明にもありましたが、乗用馬だけは他の用途の馬と

違い頭数が伸びているという背景から、生産頭数についても平成元年に比べると平成28年で200頭と、若干ですが伸びていると言えるかと思います。ただ、血統登録の時点で200頭ということで、潜在の頭数を入れても、まだまだ需要には足りていないことが、このグラフでわかるかと思います。

続きまして、日本の乗用馬市場について簡単に説明します。日本の若馬の乗用馬市場は2つ開設されています（図3）。先ほど紹介しました北海道で生産された馬を、市場で販売するための北海道の乗用馬市場と、岩手県遠野市で開催されている遠野市乗用馬市場との2市場が、日本の乗用馬市場となっています。いずれも1歳馬から3歳馬ぐらいまでが中心の市場となっています。

次に価格（図4）です。乗用馬市場の価格については、ユーザーからの要望もあり、馴致調教がこの20年の間にかなり進んでいるという背景から、平均価格としても伸びていると言えるかと思います。平成29年の市場では、初めて両市場で平均価格が100万円を超えたので

乗用馬生産地の主な分布

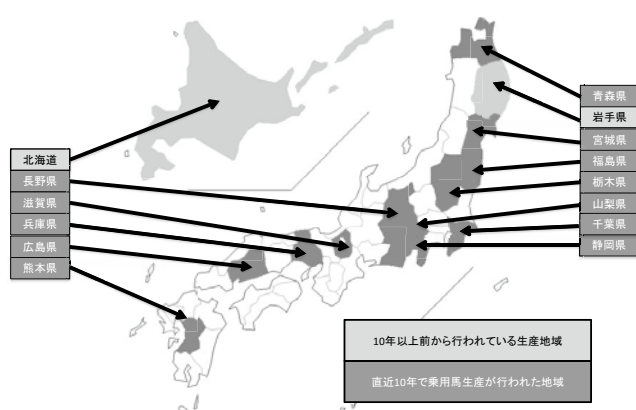


図1.

内国産乗用馬の繁殖頭数と登録頭数の推移

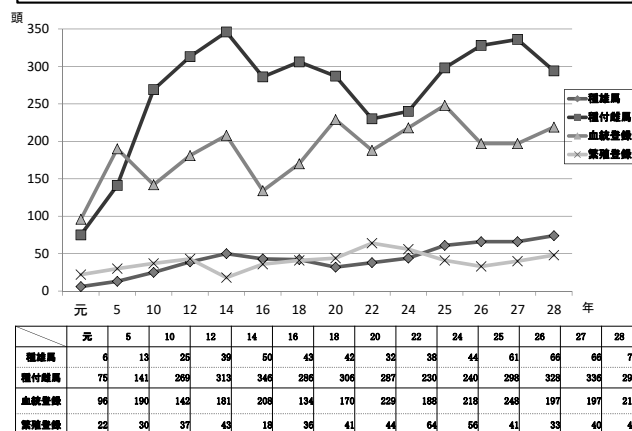


図2.

日本の乗用馬市場

北海道乗用馬市場
(北海道釧路市)

開催場所: 平成29年9月26日(火)
開催場所: ホクレン釧路地区家畜市場

遠野市乗用馬市場
(岩手県遠野市)

開催場所: 平成29年10月31日(火)
開催場所: 一般社団法人遠野市畜産振興公社
遠野馬の里

図 3.

内国産乗用馬市場の価格の推移

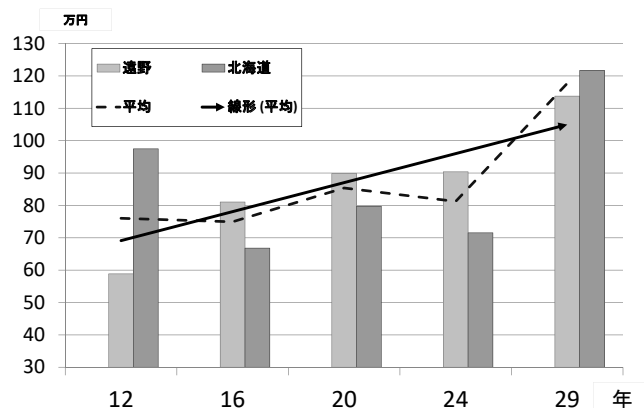


図 4.

遠野市乗用馬市場



図 5.

すが、この背景としては、サラブレッドよりも馴致調教が進んでいること、肉の市場における生体としての価値が上がったということも、ここではその上昇に繋がった要因かと思います。

それでは、遠野市乗用馬市場を取り上げて、簡単に説明したいと思います。

図5の上段が、せり名簿になります。このような形で、乗馬が可能なものについては騎乗時の写真、立ち馬およびフリースジャンプ時の写真を掲載し、加えてホームページなどを活用した動画の配信で馬の動きが

チェックできるような形で広告をしています。

馬の見せ方ですが、フリースジャンプによる展示や、騎乗によるオークションを行って、基本的には「手ぜり」という形で市場を運営しています。

先ほど2つという話をしましたが、いま内国産乗用馬と競走転用馬のためのトレーニングをした後の市場ができたので、それを少しご紹介したいと思います。

それは内国産乗用馬市場 in ノーザンホースパーク(図6)というもので、今年で5回を数えます。この市場の特徴は、1回市場で買われた馬を乗馬クラブで調

内国産乗用馬市場 in ノーザンホースパーク



騎乗による展示



牽き馬によるオークション

図 6.

教し、乗馬クラブで供用可能な状態にして、この内国産乗用馬市場 in ノーザンホースパークに上場してくるという変わったものになります。このような市場が何個かできてくることにより、乗馬クラブも馬を買いやすくなる、そして乗用馬を専門とする育成者が育ってくるということにもつながると思います。

また、贅沢を言えば、このような用途別の市場ができることによって、買う人間もきちんと限定され、価格もきちんとそこに反映されてくることになるのではないかと、これからの動きについては非常に注視をしているところです。

次に、乗用馬生産の課題について説明させていただきます。図 7 については、大きく乗用馬で使われているものを 4 つに分けさせていただきました。1 つは競走転用馬、内国産乗用馬、輸入馬、それから在来馬とポニーということです。

まず、競走転用馬ですが、特徴としては気性が荒い、それから初心者向きではない、リトレーニングが必要ということです。白い矢印のところが需要です。当然、競走転用馬では、やはり気性が荒いということから、初心者よりは、どちらかというとアマチュアのちょっと乗れる方から、プロの一部のところまでというところが需要になろうかと思っています。現状としては頭数が多いこと、それから手に入れやすいことがあって、プロからセラピーのほうまで使用されているというのが

種類	乗手	白：需要 黒：現状			
		プロ	アマチュア	初心者	セラピー
競走転用馬 ＜性質＞ ・気性が荒い ・初心者向きでない ・リトレーニング要		←→			←→
内国産乗用馬 ＜性質＞ ・大人しい ・初心者向き		←→	←→		←→
輸入馬 ＜性質＞ ・運動能力が高い		←→	←→		
在来馬・ポニー ＜性質＞ ・取り扱いやすい ・介助がしやすい				←→	←→
乗手（ライダー）の技術		高い			低い

図 7.

現状かと思っています。

続いて、内国産乗用馬ですが、特徴としてはおとなしい、初心者向きというように書いてあります。内国産乗用馬のいちばんのメリットですが、需要に対してきちんとした生産活動を行えば、どこにでも対応できるというところが、内国産乗用馬のよいところだと考えています。したがって、非常に大きな需要があるものの、先ほどもお話ししましたように市場に出るのが 200 頭前後、300 頭ちょっとというようなところですので、もう広く薄く散らばっているというような

ことが言えるかと考えております。

続きまして、輸入馬です。輸入馬については、基本的には競技会のトップの馬たちが輸入されているので、特徴としては運動能力が高いと言えます。運動能力が高い競技用馬ですので、当然全日本チャンピオンや、世界のチャンピオンシップを決めるような大会に出るような選手が、競技会に活用するために輸入されてくる馬なので、需要はプロやアマチュアの上級者あたりと考えています。実際には内国産乗用馬の質の向上がまだできていないということ、それから競走転用馬がこちらの用途にまだまだ食い込むまでの質が足りないという実情があり、現状としてはアマチュアのちょっと乗れる方まで、高額なお金を出してまでも輸入するのが現状となっております。

それから在来馬、ポニーですが、取扱いが容易、介助がしやすいということです。先ほど全国乗馬倶楽部振興協会藤田氏のほうからも話がありましたので、ここでは割愛させていただきます。

続きまして、内国産乗用馬の問題点（図8）です。当然、頭数は増えていかないと質の高い馬はできてこないで、頭数の増加は必須の課題であると考えています。そのため、頭数を増加させるには、生産者の増加、後継者の養成が成され、産業として成立すべきところではありますが、まだそのようなことができていない状況です。

それから、荒川氏の話にもありましたように、目的別の多種多様な利活用を考えていくうえでは、目的別の牝牝の選定ということを、きちんと生産界はしていかなければならないと考えております。そのような選定の手段というのが、まだ乗用馬の生産ではできていないというのが現状かと思えます。

また、乗用馬生産の技術では、サラブレッドとは違い、人工授精を活用した生産活動がもっともっと進んでいくべきだと考えています。

それから、育成馴致調教のほうですが、育成と馴致の調教を専門にする者がいないというように書くのはちょっと語弊があるのですが、このような方たちが専門家として、専業としてやっていける業界になるべきではないかと考えています。

それから、レジャーホース、体験乗馬ですが、こちらも先ほどの繁殖牝馬と同様に、利用目的別の品種の設定というのができていないと書かせていただきました。

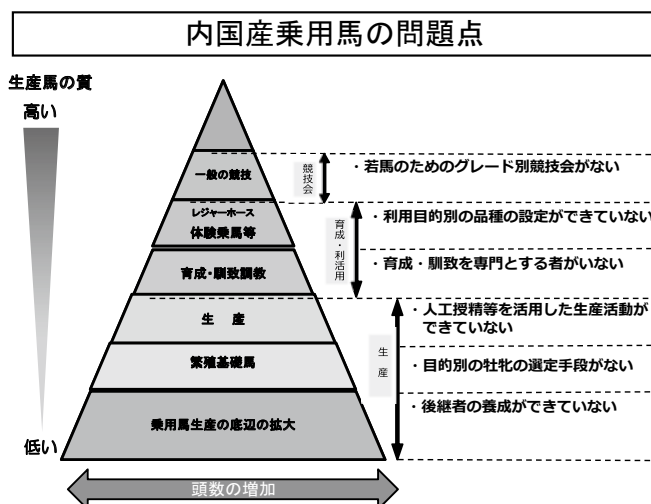


図8.

た。これもちょっと書き過ぎなところもあるのですが、当然このレジャーホース、体験乗馬というように一括りにしても、かなり多種多様なものが求められるかと思えます。

それに対してきちんと、どのような品種のものが適正なのか、どのような性格の馬が必要なのかということは、より整理をしていかなければ、安心・安全な乗馬ということにはならない。安心・安全な乗馬ができないことには、そこに発展はないと思いますので、このようなことをきちんと整理をして、より大きな産業にしていく必要があるのではないかと考えます。

それから一般の競技のところですが、内国産乗用馬のほうから考えると、若馬のためのグレード別の競技会の設定がないと書かせていただきました。

最後に提言（図9）です。まず生産ですが、先ほどの問題点を3つ挙げさせていただいた中で、人工授精の技術の普及と受胎率の向上、それから、用途別の牝牝の選定方法の確立と書かせていただきました。まず牝のほうは、今年からフランスの輸入凍結精液を常時輸入することが可能になりました。乗用馬の先進国であるフランスについては、用途別の牝の選定がきちんとできており、当然能力評価をしたうえで凍結精液を作れるということです。牝のほうについては日本の牝を選定するというよりは、まずは海外の凍結精液を入れて、そこから基礎牝馬をつくっていくほうが早道ではないかと考えています。

また、牝のほうも、サラブレッドの活用や、おとな

各ステージの課題と提言

ステージ	問 題 点	提 言
生産	- 人工授精等を活用した生産活動ができていない - 目的別の牝馬の選定手段がない - 後継者の養成ができていない	- 人工授精技術の普及と受胎率の向上 - 用途別牝馬の選定方法の確立 - 生産コストの低減 - 育成者の養成による分業制の確立
育成 利活用	- 利用目的別の品種の設定ができていない - 育成・馴致を専門とする者がいない	- 用途別の利活用に適切な品種の選定及び活用の推奨 - 多様なニーズへの育成調教技術
競技会	若馬のためのグレード別競技会がない	- 内国産乗用馬・競走転用馬のための競技会の開催 - 若馬専用競技会の開催

図 9.

しい乗用馬の中から選定をして、どのようなものが用途別にいい牝馬なのかというようなことも選定し、そういう選定方法を確立していく必要があると考えています。

また、後継者の養成ができていないというところですが、ここについては後継者の養成をするためには当然生産コストの低減、つまり生産者が儲からないといけないということになると思います。そのためには、生産者と育成というところをまず分業していくことも、1つの形ではないかと考えています。

軽種馬の業界では、コンサイナーというのがあるかと思いますが、乗馬のほうでは、いまはまだ一体的に行っている状況になっています。価格的にそれだけの大きな取引が行われていないので、この分業というのは一概に書いてはいますが、非常に現実としては難しいところもあるかと思っています。このようなことも将来的にはできなければ、内国産乗用馬はより発展していかないのではないかと、わたし個人としては考えております。

それから育成利活用についても、利用目的別の品種の設定ということでは、利用に適切な品種の設定と活用を推奨をするべきだと考えます。当然、その多様な

ニーズへの育成技術と、ここの活用の推奨のところはリンクしてくるのだと思うのですが、この多様なニーズに対してどのようなものがベストなのか選定しながら、馬だから使うということではなくて、ニーズに応じた品種、形、大きさ、性格ということをきちんと整理していくことが必要不可欠ではないかと考えております。

競技会について、若馬のグレード別の競技会がないという点ですが、一部では内国産乗用馬、競走転用馬のための競技会は開催されています。このような競技会が多くなっていくことによって、当然この育成技術者に反映してくる。育成技術者が活躍できるようになれば、ここへの導入のお金がきちんと落ちてくるということで、先ほど荒川氏が講演されていました円グラフの、みんながハッピーというところにつながってくるのかなと考えます。

また、将来的に頭数が多くなれば、若馬専用の競技会も開設されてこなければいけないと考えます。しかしながら、生産頭数が120頭、200頭というような小頭数の生産では、若馬専用の競技会はまだまだ難しいところではありますが、海外ではフランスやほかの国でも、この若馬の3歳チャンピオン、4歳チャンピオンがきちんと市場の中に反映され、取引の価格にも反映されるというような現状を考えれば、日本でも頭数が多くなれば、このような競技会の開催も決して夢ではないと考えています。

最後になりましたが、いろいろな課題を提言させていただきました。ただ、わたしが1人考えただけでも、まだまだやっていないことがこれだけあるということは、日本の乗用馬生産、内国産乗用馬の未来については、まだまだやることがたくさん残されていますが、課題解決の先には明るい未来が待っているものと考えます。

ご清聴ありがとうございました。

講演

日本のサラブレッドの現在・未来 —競走馬のセカンドキャリアへの展開— 角居勝彦



角居勝彦（すみい かつひこ）

1964年生まれ、石川県出身。グランド牧場勤務から、調教助手を経て、2000年に調教師試験に合格。開業後はウオッカで東京優駿、ヴィクトワールピサでドバイワールドC制覇等、国内だけでなく世界のGIを制覇している。2013年に一般財団法人ホースコミュニティを設立、引退した競走馬たちの支援を行っている。

JRAの調教師の角居といいます。わたしは立場上、競馬のサークルにいますので、サラブレッドを使っての話をさせてもらいます。

いまのサラブレッドの現状（図1）です。東日本大震災以降、JRAは5年連続で対前年比100%以上の売り上げが続いています。それも含めてででしょうが、競走馬売買のセリも非常に好調です。セレクトセールという一番高額で売買されるところでは、金額も落札率も今年は過去最高で、総額173億円でした。それをきっかけに、セレクション・サマーがセリ市場においてはずっと活況を呈しています。また、そのほとんどを北海道での生産が占めています。

そういう中でわたしが感じるのは、日本の競馬はやっぱり多くのファンに愛されている。それで、競馬ファンがつくっている馬文化というのが、日本の馬文化の中心を占めているのではないかと感じています。そのような状況下、サラブレッドの競馬引退後の生き方はどうなっているのかということが、非常に多くのファンがいま考えていることかなと思っています。

日本のサラブレッドの現在

- JRA売得金は5年連続前年比100%以上で推移。
- 競走馬売買のセリも好調に推移。日本競走馬協会主催のセレクトセールでは2日間通した落札総額は、昨年を更に16%上回る173億2,700万円に達し、落札率、平均価格と合わせていずれも過去最高となった。
- さらにはセレクションセール、サマーセールとも活況で売買市場は好調
- 現在の牧場数は875戸で内北海道が797戸で全国の91.1%を占めている。
- 日本には多くのファンに愛されている競馬文化があると思われる。
- そのことがサラブレッドの次の生き方を心配する多くのファンを作っているとも言える。

年	JRA売得金(対前年比)	セリ	セールの落札総額(税別)
23年	2,293,578,053,600 (94.5%)	セレクトセール	17,327,000,000円
24年	2,394,308,856,700 (104.4%)	セレクションセール	2,880,200,000円
25年	2,404,933,513,200 (100.4%)	サマーセール	5,057,400,000円
26年	2,493,627,729,400 (103.7%)	HBATレーシング	1,189,900,000円
27年	2,583,391,869,800 (103.6%)	JRAブリーズアップ	628,100,000円
28年	2,670,880,261,600 (103.4%)	千葉サラブレッド	727,400,000円

図 1.

また別の話ですが、日本の競馬の総賞金です。世界の総賞金の水準（図2）を示してみましたが、日本は833億円を超えています。競馬先進国といわれているアイルランドでは37億円、イギリスでも167億円、フランスも似たようなものです。アメリカの1,149億円というのは、生産界が持ち寄って出している部分の賞金もあるので、単純にファンから集まっているお金で賞金が成り立っているのは、日本だけだと思います。

さらに、日本では中央・地方合わせてではありますが、一競走あたりの平均の賞金が500万円を超えています。総額の賞金があればだけ大きかったアメリカでも、一競走に水準化すれば本当に300万円に満たないというところからみれば、日本の競馬、サラブレッドの文化というのは本当に、もちろんファンにも優しいのですが、この賞金を見るとファンならず、生産者、馬主にとっても、この業界は非常に夢のある業界だなという感じさせてもらっています。

それで、わたしがいま本業の調教師の他に、ホースコミュニティというところの理事長をさせてもらって

日本のサラブレッドの現在

世界の総賞金は、日本833億2,601万6,952円、アイルランド37億5,475万9千円、イギリス167億3,854万5,835円、フランス166億4,761万3,910円、アメリカ1149億6,391万9,453円。（1ユーロ137円換算・2015年）

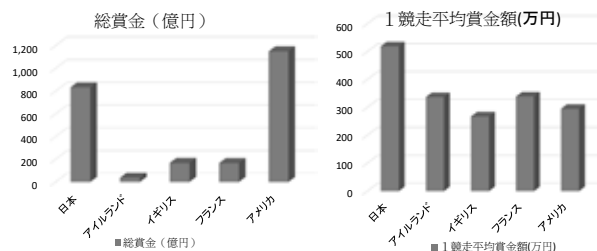


図 2.

います。その大きな活動として4つほど進めているところでもあります。まず、馬は非常に能力の高い動物であることを、ぜひ皆さんに知ってもらいたいということから、サンクスホースデイズ（図3）というイベントを行っています。知っている関係の馬主さんから寄付を募りながら、過去神戸の三木ホースランド、浦河の乗馬園、金沢競馬場、名古屋競馬場、その他高知、佐賀、それから昨年においてはJRAの馬事公苑でやらせていただき、今年度は東京競馬場でも開催させていただきました。

これは、わたしたち調教師は特にそうですが、賞金も名誉も競走馬からいただいています。これをぜひ知ってもらうことが一番大切と思い、馬への感謝の気持ちということでサンクスホースとなって、ここに乗馬界のトップライダー、それから障害者乗馬の活動をされている方々を呼んで、さらに学術的な知識を持っている方に、競走馬にどのような未来があるかということの研究発表していただくようなイベントをやらせていただくということです。

また、障害者、もしくは精神的に困られている方の団体も、実際こういう活動をされている団体がいくつもありますので、そういうことを紹介していこうという場所になっておりました。

それで、多くの問題点があるのですが、まずわたしの立場から言うと、サラブレッドの中で、結果が出せなくなったことで競馬の用途がなくなった馬がいるわけです。実際、毎年サラブレッドは約7,000頭生産されますが、新馬・未勝利戦を勝ち上がれる馬は、1,300

頭ぐらいしかいません。それからもちろん地方競馬、乗用馬に転用される馬もありますが、3,000頭以上の馬がこぼれていくのかなと。そういう馬たちを乗用馬に転用するということで、キャリアをつける。もしくは、おとなしく歩ける、ホースセラピーの活躍ができるようになればということで、いまは吉備高原サラブリティレーニングというところと、プロジェクトのパートナーとしてやっています。サラブレッドの高価な預託料を捻出する方法の1つとして、吉備中央町とタイアップして、ふるさと納税を使ったリトレーニングがプロジェクトとして始まっています。

そこでリトレーニングされた、乗用馬としてキャリアを持った馬を、情報管理をしながらずっと追跡するという活動（図4）を行っております。

そして、いま乗馬の会員は7万人強になるようです。競馬ファン500万人という数からすると、圧倒的に小規模な数です。そして、競馬の世界では、1頭の馬を400人とか500人の会員さんで持つ、会員制の一口馬主制度というのがあり、そういう人たちが馬を救いたいという気持ちを持ち始めました。そういう競馬ファンが直接引退馬を支援することに関わっていければということで、TCCファンクラブという、引退した馬がさらにファンを引き連れて、この乗馬のサークルの中に流れ込んでいってもらいたいという活動をしています（図5）。

それで安価で気軽な乗馬ライフができればいいなと思います。また、障害者乗馬（ホースセラピー）などに関連していただくボランティアスタッフも、こうい

ホースコミュニティの活動

1. サンクスホースデイズ

これまで神戸、浦河、金沢、名古屋、園田、高知、佐賀、JRA馬事公苑、JRA東京競馬場等で実施



- ・馬への感謝や人と馬との繋がりを啓発するイベント
- ・広く世間一般に馬の有用性を告知
- ・障がい者乗馬やホースセラピーの実施・紹介

図 3.

ホースコミュニティの活動

2. 引退サラブレッドのキャリア支援

サンクスホースプロジェクトにて
キャリアマネジメント(情報管理・公開)を行っている



・NPO法人吉備高原サラブリティレーニング (プロジェクトパートナー)

リトレーニング(再調教)とキャリアパス(キャリア構築)を担い、これまで49頭の馬をセカンドキャリアへ繋いでいる。その運営資金は岡山県吉備中央町と連携してふるさと納税を利用している。



図 4.

ホースコミュニティの活動

3. 引退馬ファンクラブ(TCCFANS)支援

引退馬を活用した馬事業界のプラットフォームを構築することにより、馬とともに人の交流、流入を促し、受け皿となる馬事業界全体の底辺拡大を図る。



- ファンが直接関われる引退馬支援
- 安価で気軽な乗馬ライフ
- 新規利用者の創出
- 馬の多様な利活用



図 5.

う活動の中から育っていく方法はないかなということも考えております。

それと、もう1つ（図6）ですが、実際に浦河町では行政のほうから支援をいただきながら、乗馬療育の活動が行われています。浦河における障害者乗馬では、身体障害の方、知的障害の方、精神障害の方を対象に行われており、さらには高齢者乗馬（実際98歳の方もいま乗っていただいているという話を聞いています）、浦河町児童デイサービスなどの活動も行われていて、こういうところと関連することで、行政とお金の集め方が見つけられるのではないかと、考えております。

一応、この浦河での乗馬療育の活動も、今年度中には独立して運営していける団体になりそうだとということで、さらに一歩進んだのかなと思っております。

また、ホースコミュニティの話とは違いますが、いま障害者乗馬を実施している主な団体を、うちの事務の方にちょっと調べてもらいました。実際正確な数がわかったわけではないのですが、200以上の団体が活動しているといわれています（図7）。その中の主な団体としては、4つが中心となっていると思います。RDA Japan、ピルエット、ハーモニセンター、JRAD（日本障害者乗馬協会）の4つです。それぞれの団体ごとに特徴がありますので、それぞれが1つになるということと、もしくは200以上の団体が、1つの目的のために障害者乗馬が1つになるということは、そう簡単なことではないと感じています。

さらには、なぜ広まらないのかという点においては、

ホースコミュニティの活動

4. 浦河町での乗馬療育

- ・障がい者乗馬(身体・知的・精神)の実施及び研究
- ・浦河町児童ディサービス
- ・高齢者乗馬(浦河町介護予防センター、健康道場)



図 6.

障がい者乗馬を実施している主な団体

日本ではどのくらいの団体が障がい者乗馬をおこなっているのか確認できていないが、少なくとも200以上の団体が活動していると言われていた。主な団体は以下の4団体。

- RDA Japan
- ピルエット
- ハーモニセンター
- JRAD(日本障害者乗馬協会)

なぜ広まらないのか？(問題点)

- ①障がい者乗馬に適した馬及び人材不足
- ②各団体により異なる資格制度
- ③運営資金が足りない
- ④利用者が急に増えても受け入れるキャパがない

図 7.

障害者乗馬に適した馬（本当にサラブレッドは向いていないなと実際思いますが）、それから人材がまず足りていない。先ほど言いましたように、各団体による資格制度も違う、当然目的が身体による障害を強く特徴的に救済している障害者乗馬であったり、子どもたちのために、それからパラリンピック、競技志向のためにというところもあると思いますし、そうなれば当然資格制度も随分違うものだと思います。いちばん大きなところは、やはり人と運営資金が足りないという点です。

立場的にメディアを使って、こういう活動をされている団体があるということは結構発信させてもらったこともあります。実際、それでどこへ行けば利用させ

てもらえるのですかといいても、いざ紹介すると、そこにたくさんの問い合わせが行ってしまいます。そこには適応するだけの馬も人もいないということで、結局はキャバが足りないのです、こういうことを急激に宣伝してもらっても困るということになります。いい活動であるといえども、なかなか表立って説明して広めてはいけないというところがあります。

また、いまは馬だけでなく、世界的に動物福祉に関する話が実はたくさん出てきています（図8）。日本ではアニマルウェルフェアということで、動物福祉という用語を使っていますが、実は本来のアニマルウェルフェアという言葉は、幸福で、ちゃんとして生きているかどうかということをテーマとして言われているのだそうです。本当にそういうことから考えると、畜産として牛や羊や鶏も含めてでしようが、動物たちが自然に行動できるように快適な環境を整えてあげることが、世界的に問われるような時代になってきています。

そういう中でのサラブレッドのアニマルウェルフェアを考えなければいけないときに、先ほど荒川さんからも説明がありましたように、日本の馬文化というのは、もうサラブレッド中心になってしまったと。だからこそ、サラブレッドを生活の糧にしている調教師は、本当に引退した後のサラブレッドの、より良い活用方法を考えるべき立場にあるのではないかと考えています。

もちろん、先ほどからも言いますように、世界的に引退したサラブレッドを支援する活動を行っている団

体には、アメリカではTAA、イギリスではRoR、それからオーストラリアではOff The Track、ドバイではFALCONという団体があります（図9）。

島国である日本では、自国で生産したサラブレッドの行き先をごまかして、違う国に持っていくという方法はないので、自国の中でいかに次の生き方を見つけてあげるべきなのかということになります。

サラブレッドの未来を考える中で、馬ができることは何なのかということを考えてみたときに、馬は人を乗せるということと、それからわたしが特に感じるのは、人の思いや感情を知ることができる動物ではないかなと思います（図10）。毎年7,000頭、過去には1万

サラブレッドのアニマルウェルフェアとは

今の日本の馬文化はほぼサラブレッドである。
農耕・運搬用等の使役目的はもう無い。

競馬シーンを退場したサラブレッドのwelfareとは？

世界でも引退したサラブレッドを支援する活動がある

- ・アメリカ(TAA)
- ・イギリス(RoR)
- ・オーストラリア(Off The Track)

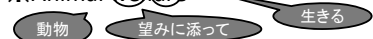
オーストラリアでは今年から引退競走馬も全頭情報管理すると決められたそう。
・ドバイ(FALCON)

図 9.

産業動物のアニマルウェルフェア

今、馬だけでなく世界的に動物全体に対する福祉(アニマルウェルフェア)が注目されている。

※Animal welfare



日本では「アニマル・ウェルフェア」を「動物福祉」と訳され広まってきましたが、「福祉」という言葉が社会保障を指す言葉としても使用されていることから、本来「アニマル・ウェルフェア」に含まれる「幸福」や「良く生きること」という考え方が十分に反映されておらず、誤解を招く恐れがあります。今回は敢えて翻訳せず「アニマル・ウェルフェア」という言葉を使い、「動物たちが自然に行動出来るように、快適な環境を整えること」と説明させて頂いた。

人間にかかわるようになった家畜動物に対して与える痛みや苦痛を最小限に抑える考え
犬猫の世界ではあらゆる場所で議論され、その為の法改正を議員を巻き込んでおこなわれている。

図 8.

サラブレッドの未来

できること

- ・馬は人を乗せることができ、人間の思い感情をも知ることができる動物
- ・毎年約7,000頭のサラブレッドが生産されているので、豊富な馬資源がある。(過去12,000頭以上生産していた時代もあった)
- ・500万人いと言われる競馬ファンを巻き込み、乗馬はもちろん教育・医療・介護・福祉分野においても馬が新しい雇用を生み出す。
 - ・青少年、子供達 スポーツ、情操教育、生き物とのコミュニケーション体験
 - ・障がい者 精神障害…メンタルヘルスケア
身体障害…働く場(就労)、身体機能回復
知的障害…生活の場づくり
 - ・高齢者 生きがい、再雇用、健康寿命を延ばす、馬の経験を活かした生活の知恵を次世代に伝える
 - ・受刑者 精神的な更生プログラムや一般への偏見をなくす
⇒再犯率の低下、出所後の働く場づくり
- ・高齢化、過疎化した町の遊休地を利用した町づくり(日本版CCRC)
- ・東日本震災地の復興支援活動

図 10.

サラブレッドの未来

サラブレッドである問題点

1. 乗馬経験のない素人がいきなり触ることが難しい動物
2. 血統的に難しい気性の馬が多く、スイッチが入るとコントロールが困難。精神的なものによる疾病も多い。
3. 体高が高いため、ある程度体が大きい人でないと乗ることが難しい。また、落馬した際、怪我に繋がりがやすい。
4. 1頭1ヵ月10万円前後の飼葉料が必要になる。新たな治療費が必要となればさらに高額な経費が必要。
5. 競馬ファンを味方につけるには、競走馬引退後の情報管理を適切に行わなければならないが、現状できているとは言い難い。

図 11.

2,000 頭のサラブレッドを生産していました。競走馬で早く走れなくても、豊富な馬資源があります。

それから、500 万人という競馬ファンは、非常に大きな資源であると思います。これは障害者だけではなく、青少年や高齢者、それから受刑者への再就職プログラムであったり、本当にいろいろな活動に馬が使えるということを感じさせてもらえます。いま高齢化、過疎化した町を使った Continuing Care Retirement Community (CCRC) という活動も、政府から問われている話です。東日本大震災からの復興ですが、馬産の有名な地域も含まれていると思います。

サラブレッドである問題点を図 11 に示しました。先ほど山下さんからお話いただいたように、その扱いは素人では大変だと。それから、血統的に難しい気性の馬が多くて、鳥根県で事故がありましたように、そういう点からも安全を守るためのガイドラインをつくらないといけないという部分も感じます。サラブレッドは、そういう意味では大きくて使いにくい馬種です。

さらには1ヵ月10万円前後の飼葉料。サラブレッド

まとめ

これから日本が進むであろう問題

1. 少子高齢化による労働力不足、税収減、介護、医療費の拡大
2. 人口の中央集中による地方の過疎化の問題
3. メンタルストレスにより就学就労困難な人の増加、そのことによる犯罪の増加

日本が抱える多くの問題の中に、馬を使った活動で地域活性、馬が核となったコミュニティを作ることでこれらの問題を解決できる場所を産官学の連携と各省庁の壁を破った活動を考えることによって少ない予算で多くの人たちを助ける活動が馬のできるのではないかと考えている。

図 12.

は大きく繊細な動物なので、治療費がかかることも多いような気はします。そういう意味では、随分とお金がかかる動物であり、この部分を何とか考えないといけない。

それから競馬ファンが、必ず、あの馬のその後はどうでしたかとホースコミュニティに尋ねてくることを考えれば、競馬を引退した後の馬の情報管理をきちんと見極めてやっていかないといけないと思います。

それから、日本で、これからさらに進むと考えられる少子高齢化や、労働力不足、介護・医療費の増大、過疎化の問題や、特にいま問題になっているメンタルヘルスに、馬は寄与できるのではないかなと感じています。馬が核となったコミュニティをつくることで、経済的に非常に安い予算で、多くの人たちを助ける活動（サラブレッドだけではないと思います）において、非常に宣伝する力を持っているのがサラブレッドだと思いますので、ぜひこういう活動が広まっていくことを望んでいます（図 12）。

どうもありがとうございました。

講演

日本のサラブレッドの現在・未来 —競走馬の馬術競技馬への転用— 木口明信



木口明信（きぐち あきのぶ）
東京都出身。1979年東京農工大学農学部獣医学科卒。
1979年日本中央競馬会入会後、馬事部調査役、日高育成牧場副場長、生産育成対策部次長、馬事部生産育成対策室長、札幌競馬場長、競馬学校長を経て、2014年（公社）日本馬術連盟常務理事に就任、現在に至る。

日本馬術連盟の木口です。よろしくお願いします。
私は競技団体からの立場で、このテーマ（競走馬の馬術競技馬への転用）についてお話ししたいと思います。

図1の馬はオオスミイレブンという元競走馬で、名牝ロジータの産駒です。JRAの北原職員が馬術競技馬として調教しているところです。

馬術競技馬の現状（図2）からお話ししたいと思います。まず、馬術競技馬とは、日本馬術連盟（日馬連）の立場から言うと、日馬連に乗馬登録のある馬ということになります。乗馬登録がないと日馬連の主催競技会とか、日馬連が公認する競技会に出場することができません。

乗用馬の頭数ですが、平成22年の中央畜産会の調べによると、1万5,543頭で、同年の日馬連の乗馬登録馬の数は、3,763頭でした。このことから乗用馬の約4分の1は馬術競技馬であることがわかります。

馬術競技馬のうち、元競走馬がどのくらいいるのでしょうか。最新の数字で、平成28年の乗馬登録馬の数3,877頭のうち、元競走馬が1,693頭、42.1%で、



図1.

かなり大きな比率を占めています。このことから、元競走馬は重要な馬術競技馬の資源であると考えられます（図3）。

競技馬の年齢別の登録状況（図4）を見てみます。乗馬登録は毎年更新が必要なので、乗馬登録数は、現役の競技馬の実数ということになります。

年齢の幅は、3歳から29歳でした。頭数の多い年齢ですと、100頭を超えるぐらいになります。一般的に、馬術競技馬のピークは9～10歳から14歳とされています。サラブレッドの場合は若干成長が速いので、もう少し若い世代にピークがきているかもしれませんが、図4のような集団になっています。

馬術競技馬の現状

馬術競技馬の定義：日本馬術連盟(JEF)の乗馬登録のある馬
JEF主催競技会・JEF公認競技会に出場可

・乗用馬頭数 15,543頭(H22) 中央畜産会調べ
3,763頭(H22) JEF乗馬登録



乗用馬の約1／4が、馬術競技馬

図2.

・馬術競技馬 3,877頭（H28年JEF乗馬登録馬）
・内元競走馬 1,693頭（サラ系 1,631, アラブ系 62）
元競走馬比率 42.1%



元競走馬は、重要な馬術競技馬資源

図3.

元競走馬の年齢別乗馬登録状況(H28)

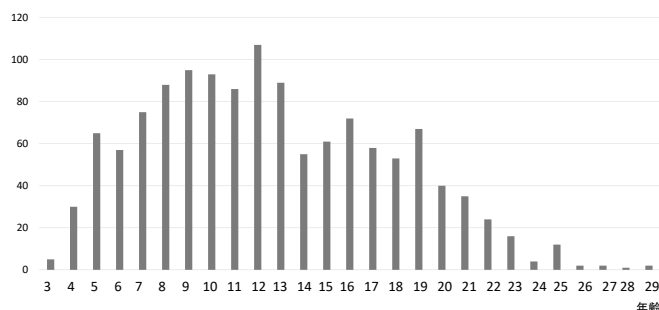


図 4.

内国産競技馬の振興

内国産馬の定義: 内国産馬 + 国内で競走馬登録のある外国産馬

1. 内国産限定競技の実施

- ・内国産障害飛越競技
- ・内国産馬場馬術競技

全日本馬場馬術競技大会Part II は、全ての競技が内国産馬限定

2. 内国産競技馬の表彰

最優秀内国産馬 障害・馬場・総合・エンデュランス

図 5.

次に、内国産競技馬の振興（図 5）ということを経営団体の業務として実施しています。競馬の世界では中央競馬において、以前は内国産限定競走がありました。乗馬の世界でも、内国産馬を振興するための競技会、競技を開催しています。

日本馬術連盟の内国産の定義は、国内で生産された馬、もしくは国内で競走馬登録のある外国産馬となっています。

内国産馬振興策の内容は 2 種類あります。1 つは内国産限定競技の実施です。障害馬術には内国産障害飛越競技というのがあり、馬場馬術では内国産馬場馬術競技という選手権があります。

全日本馬場馬術大会 Part II は、内国産馬馬場馬術選手権競技を含め、全ての競技が内国産馬限定となっています。

もう 1 つは、内国産競技馬の表彰というのがあります。障害、馬場、総合、エンデュランス、この 4 部門に分けて、それぞれの一番優良な馬について最優秀内国産馬として表彰しています。

元競走馬の競技別出場状況(障害馬術)

競 技	高 さ	元競走馬	全 体	比 率
大障害	150cm～	0	129	0.0%
中障害A	140cm	3	202	1.5%
中障害B	130cm	10	271	3.7%
中障害C	120cm	50	284	17.6%
中障害D	110cm	118	329	35.9%

※ 全日本障害馬術大会Part I・Part II (2012～2016年) の成績



図 6.

次に、元競走馬がどのような競技に出場しているか、レベルはどうかということをお示ししたいと思います（図 6）。

まず、障害馬術における元競走馬の競技別の出場状況です。これは、過去 5 年の全日本障害馬術大会 Part I, Part II の成績に基づいています。レベル的に大障害、中障害 A, B, C, D と 5 段階に分けられます。大障害の中には 160 cm クラスの大障害 A と、150 cm クラスの大障害 B があり、これら 2 つをまとめて大障害としてあります。

過去 5 年間のクラス別の総数を示しています。元競走馬の出場状況は、150 ～ 160 cm クラスの大障害は 0 頭、140 cm クラスの中障害 A が 3 頭、130 cm クラスの中障害 B が 10 頭、120cm クラスの中障害 C が 50 頭、110 cm クラスの中障害 D が 118 頭で、比率にしますときれいに並んでいます。一番下のクラスの中障害 D だと約 36% 占めているということです。障害馬術でみますと、下位のクラスに元競走馬が多く出場していることがわかります。

続きまして、馬場馬術（図 7）です。馬場馬術は、レベル的にグランプリから L クラスまであります。全日本馬場馬術大会 Part I という競技会の過去 5 年間の出場の状況を調査したところ、グランプリクラスには 8 頭いました。以下 1 頭、12 頭、8 頭、10 頭、25 頭ということで、ばらつきがあるのですが、実は先ほど内国産の競技ということでも説明した内国産の選手権がセントジョージクラスで行われているということもあり、セントジョージを目指す内国産馬が多いのです。ということで、その比率が高くなっていると思われます。一番下のクラスは、最も多く 24% ありま

元競走馬の競技別出場状況(馬場馬術)

競 技	元競走馬	全体	比率
グランプリ	8	83	9.6%
インターメディアイト I	1	78	1.3%
セントジョージ	12	87	13.8%
Sクラス	8	116	6.9%
Mクラス	10	106	9.4%
Lクラス	25	104	24.0%

※全日本馬場馬術大会Part I (2012～2016年)の成績



図 7.

元競走馬の競技別出場状況(総合馬術)

競技	元競走馬	全体	比率
2.3スター	3	29	10.3%
1スター	4	28	14.3%
EV100	21	52	40.4%
EV90	22	56	39.3%

※全日本総合馬術大会(2012～2016年)の成績



図 8.

した。ただ、競走馬と馬術競技馬では求められる動きが異なり、特に馬場馬術の馬というのは特別な動きが要求されます。おそらくサラブレッドにはかなりきつい運動をさせていることになると思います。馬場馬術が、サラブレッドにとって最も難しい競技なのではと考えております。

続きまして、総合馬術(図8)です。総合馬術は初日に馬場馬術、2日目にクロスカントリー、最終日に障害馬術を行い、これら3種目を1頭の馬で行う競技会です。区分的に2スター、3スタークラスというのを一番上に置いてあります。1スター、EV100、EV90、これはクロスカントリーの固定障害の高さの違いで、EV90が入門編というようなクラスで、EV100がその上のトレーニングクラスの競技会です。これも全日本総合馬術大会の過去5年間の成績をみたものであり、下のクラスでは元競走馬の数が多いということになっています。

続きまして、馬術競技馬として活躍した競走馬を図

馬術競技馬として活躍した競走馬

- Black foot Mystery:
リオ・オリンピック総合馬術米国代表馬 個人16位
- ミルキーウェイ(シルバータイセイ):
ソウル・バルセロナオリンピック障害馬術代表
- トップギア I (ターボギア):全日本障害飛越選手権 優勝3回
- ヤクモマサノリ(未出走):ソウルオリンピック総合馬術代表
- キャスパー : 全日本馬場馬術選手権5連覇(1988～1992年)

図 9.

まとめ

- 元競走馬が最上位クラスの馬術競技馬に成長することは極めて難しい
- オリンピック3種目で、最も適性があると思われる競技は、総合馬術
- 競走馬は、馬術競技馬の重要な資源



図 10.

9にお示しします。2016年、リオ・オリンピックで、アメリカの総合馬術の代表になった馬がいます。ブラックフットミステリーという馬で、個人の16位に入りました。過去には、ミルキーウェイ(競走馬名シルバータイセイ)という馬が、ソウルオリンピック、バルセロナオリンピックの障害の日本代表になっています。また、障害馬術の世界では、トップギアが、全日本障害選手権で優勝を3回しています。

それから総合馬術では、ソウルオリンピックの代表馬としてヤクモマサノリという馬がいました。馬場馬術では、全日本馬場馬術選手権5連覇という馬がキャスパーで、これも元競走馬です。

まとめ(図10)になるのですが、元競走馬にとってオリンピックで最も適性があると思われるのは、総合馬術であろうと思われます。総合馬術の第1種目目の馬場は、M～Sクラス程度であり、第3種目目の障害は、130 cmクラスで、それほど高いレベルが求められないからです。最も元競走馬にとって得意であろ

うと考えられるのが、クロスカントリーですので、一番チャンスがあるのは総合馬術だと思われます。

実際、先ほど述べたように、アメリカのリオ・オリンピックの総合馬術代表馬は元競走馬です。元競走馬が最上位クラスの馬術競技馬に成長することは極めて難しいと思います。過去に優秀な馬たちもいましたが、これらは極めてまれなケースです。それでも、元

競走馬が馬術競技馬としての重要な資源であることには間違いありません。こういった馬たちの中からごく稀かも知れませんが、優秀な馬が出て、夢をつかんで羽ばたいてくれることを期待します。

今後の元競走馬の馬術競技馬としての活躍に期待して、私のお話を終わります。ありがとうございました。

講演

馬の将来展望

—我々は馬のために何をなすべきか—

局 博一



局 博一（つばね ひろかず）

日本ウマ科学会役員（元編集担当常任理事）。公益財団法人全国乗馬倶楽部振興協会「馬の多様な利活用推進検討事業」委員／「大衆と馬とのふれあいタイム推進事業」委員／「乗馬等を通じた被災地支援（馬とのふれあい）事業推進」委員。馬によるセラピー、教育、地域振興など馬の持つ多彩な能力を活かした社会貢献を支援するための活動を行っている。また、馬による障害者の健康効果および評価指標に関する研究支援活動を行っている。

局と申します。よろしくお願いします。

最後に「我々は馬のために何をなすべきか」という大きなテーマをいただきまして、これもわたし1人で答えられるようなものではございませんので、何かの話のきっかけになればなというぐらいの感じでお話をさせていただきたいと思います。

荒川さんのほうからでもご紹介がありましたように、従来からのスポーツレクリエーションとか、ほかに教育とかセラピー、それから地域振興、観光といったいろんな分野で馬が活躍してきています。結果的には、全体として見たら、何より健康社会が築き上げられていけば、大変よろしいのではないかなと思います（図1）。

お手元にございますように、馬の多様な利活用事例

集というものが今年の3月に報告書として出されました。教育、福祉セラピー、観光、地域振興といったいろんな分野で、どのような馬が利用され、どのような場面で活用されているかといったことが事例集として紹介されております。

いずれも、大変素晴らしい活動事例が報告されております。個人的に関心があるのは、馬施設が福祉サービス事業所といった分野を担うようになって、単なる馬施設だけではなくて、福祉活動も併せてやっていくという形。あるいはその逆の方向でして、元々、福祉サービス事業所が馬施設を持ち、馬を飼い始めるというやり方がございます。あるいは、両者が別々ですけれども業務提携して、相互に連携してやっているというような事例もございます（図2）。

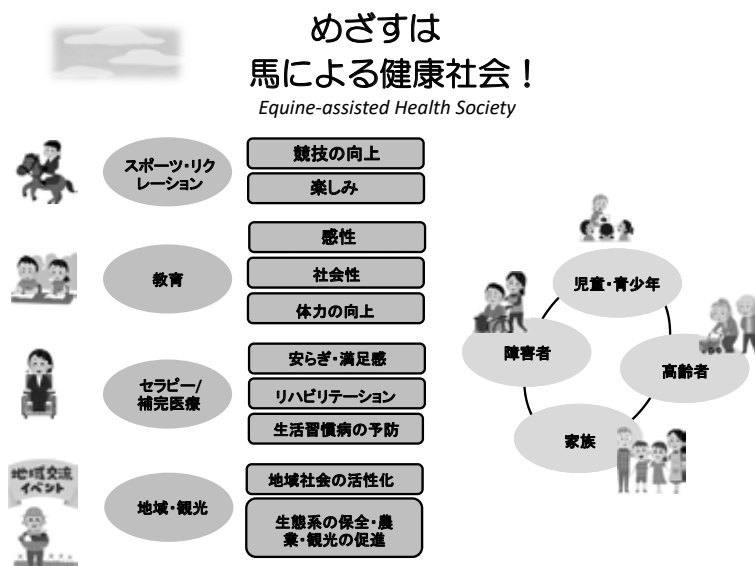


図1.

そのような事業所の一部では、農業生産を手掛けられまして、障がい者の自立支援が農業支援に結びつくような活動もごございます。さらに、医療機関や教育機関が、そのような活動に連携するという、単独ではなくて地域と連携しながらやっていくという形も珍しくなくなってきました。

多様な利活用が進んでいくためには、やはり目的に合った馬ですとか、安心して使える馬が提供されることが前提になると思います。同時にユーザー側からのニーズが、生産・育成のほうへ反映されていくというようにことも求められると思います。この3者は大変密接な関係にあります（図3）。

図4はわたしの全くの思い込みなのですが、最近では馬、特にポニーは市民レベルでの社会的動物になりつつあるのではないかなというように感じています。馬に関心がある市民が非常に増えてきており、利活用

も進んできていると。必然的に、馬の分野で働きたい人がたくさん出てくるというような状況になりつつあるのではないかと思います。

そうしますと、やはり人材育成（図5）が非常に求められるわけですが、これまでもいろんな馬関係の分野の職域といいますか、働く場所がたくさんございます。一生にわたって安心して働ける場所というのが、どんどん今後も求められていくのではないかなと思います。

若い人が馬の世界に入ってきたのだけれど、経済的に続かなくて、転職せざるを得ないというようなことも時には聞いたりすることもございます。馬を用いた福祉活動の分野においても、自立できる給料をいただいて、長い期間そこでやっていけるというような職場が増えることが今後とも必要になるだろうと思います。

色々な課題（図6）があるかと思いますが、取りあ

馬と農福連携

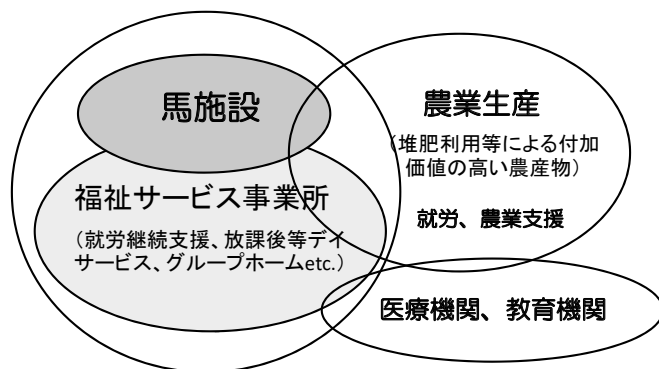


図2.

馬の多様な利活用のために

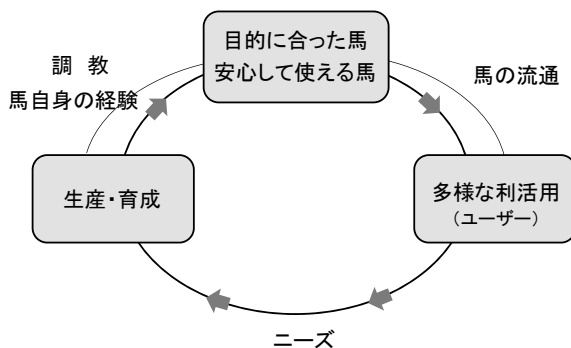


図3.

馬（ポニーなど）は市民レベルの社会的動物になりつつある

馬の利活用の多様化 ⇨ 馬分野活動者の増加



馬に関心のある市民 ↑

図4.

職域

人材育成分野

生涯にわたって取り組める働き場所

- 競馬サークル（調教師、装束師など）
- 馬術競技（一般馬術、障害者馬術）
- 馬の生産、育成
- 馬のトレーナー（一般乗馬、障害者乗馬）
- 乗馬クラブ
- 障害者乗馬施設（単独事業、福祉サービス事業所等）
- 馬ふれあい施設（教育団体、動物公園、観光施設など）
- 教育・研究機関

図5.

人材育成のうち、とくに課題と思われる分野

■ 一般乗用馬トレーナー

ふれあい馬の馴致・調教

■ 馬取扱いアシスタント

馬を安全に取り扱える支援者

■ 障害者乗馬指導者

人の健康と馬の両方を習得した
インストラクター

図 6.

えず私自身によく思い浮かぶ案件だけを、お話ししたいと思います。

1つは、一般乗用馬のトレーナーということでした、一般乗用馬、セラピー馬の馴致調教といった専門職の人です。わが国ではそういう人が、もっと多く必要ではないかなと思います。

セラピー馬ですとか、ふれあい馬につきましては、結構高齢で、馬の年齢が20歳を超えても活躍して働いている例が少なくありません。そういった馬たちに対しては、もちろん初期調教が必要ですが、その後非常に長い年月にわたってその馬をケアしていくという、そういったトレーナーがやはり必要ではないかなと思います。

それから、アシスタントと書きましたが、馬を中心に長年やっている人は、安全性も含めてそれなりのちゃんとしたものを持っていますが、ボランティアをはじめ、馬の周りで仕事をしたい、働いてみたいという人たちがどんどん増えてくるというようなことになると、馬を安全に取り扱える支援者が望まれることになると思います。そのための教育をどうするかといったことも、出てくると思います。

未来に向かって

▶ 多くの若い人が目指すことができる、夢があり安定した職域の充実

▶ 馬づくりは人づくり

図 7.

それから、最後に障がい者乗馬指導者と書いてありますが、ホースセラピーの分野はちょっと特殊でして、馬のこともよく知っていないといけない。なおかつ、馬だけでなく人間の健康についても勉強していないといけないということで、人と馬の両方をしっかりと学んだインストラクターの存在が不可欠になります。

このような分野の人材育成につきましては、医療機関、教育機関とも緊密に連携しながら、より理想的な障がい者乗馬の指導者をつくっていければよろしいのではないかと思います。

簡単ではございますけれども、馬の世界が発展する未来に向かって（図7）ということになりますと、やはり多くの若い人が目指すことができる、夢があって安定した職域の充実が大事であり、今後ますますこの分野が成長すればと願っています。

もう1つは、良い馬、目的に合った馬ということです。良い馬をつくるには、やはり人づくりという、人間の側の教育とか育成が、どうしても基本的に重要になると思います。

以上、ご清聴いただきましてありがとうございます。

総合討論

座長：楠瀬 良（公益社団法人日本装削蹄協会）

【楠瀬】当初は総合討論を30分ほどやる予定だったのですが、皆さんに熱弁をいただき、あと7～8分ほどしか時間がありません。そこで、総合討論というよりは、取りあえず質問、あるいはご指摘なり、ご感想なり、そういったものがありましたら、会場からお願いしたいと思います。

それでは、手前の方、お願いします。

【鈴木】所属は山梨県鳴沢村にあります、紅陽台木曾馬牧場の鈴木と申します。

「日本在来馬の現在・未来」ということを藤田知己先生がお話しされましたが、これはいつの時代のことをお話しされているのか全くわたしにはわかりませんでした。話をすると長くなりますので、先ほど野間馬は140cmの障害を飛ぶとありましたが、野間馬の場合、小学校6年生までで、なおかつ体重は30kgの人までしか乗れないのですね。それをどういうふうに使うのでしょうか。ちょっと、その点をお答えくださいますか。

【藤田】のまうまハイランドに、わたしどもは毎年伺っています。その中で、のまうまちびっ子祭というのが毎年行われており、その中では小さなお子様を乗せたり、それから乗らないでできるパフォーマンス、そういうことをやっております。

どういうことをやっているかといいますと、地域の方においでいただき、ドライビングなんかも親子でやっていただいています。経路をつくって時間を決めて、ドライビングを親子で楽しんでいただいています。そういう楽しみ、つまり乗ることだけではなく、乗らない中で楽しんでいただくというようなことも地域でやっています。

【楠瀬】ほかに、どなたか。

【カワイ】大阪のカワイです。主に乗用馬、大学馬術部や乗馬クラブの一次診療を行っています。

本日は、大変興味深いお話をありがとうございました。日本の馬術競技は近年レベルアップが著しく、なかなかサラブレッド種が活躍できない状況になっていると思いますが、そのサラブレッド種の乗馬競技転用について2点、現場から気づいたことを申し上げたいと思います。

まずチフニービットについてなのですが、皆さんご存じのように競走馬ではよく使われているものだと思いますが、馬術競技というのはハミとのコンタクトを重視する競技ですので、将来乗用馬に転用されるかもしれないサラブレッドに、そういうハミが使われていることについて、乗馬愛好家の間からちょっと不安視するような声が上がっているということを、1点申し上げておきたいと思います。

そしてもう1点が、鞍傷についてです。最近、中高年齢層の方の中に、乗馬を初心者として始める方が、結構多くなってきたという状況があります。そのため、以前よりもよりおとなしい、暴れない馬が求められるようになり、そのためにより高齢の馬を用いることがあったり、または餌を減らして暴れないようにするなどの対策がとられることなどが多くなったと思います。そのためもあって、またもともと細い体型も関係していると思うのですが、ほかの品種よりもサラブレッド種の乗用馬では、鞍傷がよくみられるという現状があると思います。その対策として、ジェルパッドや特殊ゼッケンなどが使われていますが、装鞍が煩雑になって、馬にも乗る人にも両方にストレスになっています。乗馬クラブにとっては、これが切実な問題となっているところもあると感じています。

例えば、日本のサラブレッド種の背中に合った鞍を開発するなど、そういう問題解決の方法などはできないものかというようなことを常々感じております。

この2点を、ウマ科学会の方々に考えていただければ幸いに思います。

そして、最後は山下さんに質問です。乗用馬の輸入精液をフランスから輸入されているということですが、なぜドイツやオランダではなくて、フランスなのでしょう。

【山下】はい。いま、なぜフランスで、なぜドイツ、オランダではないのかという質問ですね。

馬を輸入するにあたって、それぞれ国同士の協定を結ばなければならないということで、たびたびほかのヨーロッパの国で病気が発生して、輸入ができないというようなことは、関係者の皆様もよくご存じかと思っています。

輸入精液も、同様に2国間協定がございまして、フランスとは今年締結したということです。ドイツでは衛生条件は締結しているのですが、もう1つ法律があり、その2つ目の法律がまだクリアできていない段階

で、ドイツからは輸入できないということです。

答えになっていますでしょうか。

【カワイ】 オランダはいかがですか。

【山下】 オランダは、輸入精液自体をまだ入れることができないので、今後2国間協定が結ばれれば輸入することが可能だと思います。したがって、現在はフランスからしか輸入ができないということになっております。

【カワイ】 ありがとうございます。

【楠瀬】 どうもありがとうございました。ご指摘のあったチフニービットの件と、鞍傷の鞍のことで、何かシンポジストの方からコメントはないでしょうか。はい、角居さんお願いします。

【角居】 もちろん競走馬は速く走らせるために限りなく能力を発揮させることが求められます。そのために、本来食べられる以上の餌をあげていたり、それから、相手を負かさないといけないということで、サラブレッド競走馬が非常に神経質で、過敏な状況にあるために、少し強い道具を使っているということは考えられます。どんな道具においても、取扱者の丁寧な扱い方が大切であり、強い道具もいかに柔らかに使うか

というところもちろんあると思います。

サラブレッドの背中の細い体型において、本当に一律な鞍を使うしか方法がないのであれば、鞍傷、特にき甲の部分が擦れるのだろうなという気はします。その辺の事情からすれば、鞍の改良の必要性が出てきているかなとは思いますが。

うちの厩舎でもそうですが、1時間半から2時間、人間がまたがっている状況が、いまの中央競馬の中ではあるのですが、乗用馬において連続騎乗で数をたくさんこなさないようであれば、ジェルパッドを使って、なおかつ背中を休ませながらであれば、いまでは競走馬用につくられた鞍で、乗馬の方が乗っていただいても安定して乗れる鞍ができてきていますので、そういう鞍をぜひ乗馬界の人も取り入れてもらえればという気はします。答えになっているでしょうか。

【楠瀬】 大丈夫です。どうもありがとうございました。

時間がなくなりましたので、これで終わりたいと思います。皆様、ご清聴ありがとうございました。

(編集・監修：石田信繁)

書籍紹介

『サラブレッドに「心」はあるか』（中公新書ラクレ）

著 者：楠瀬 良

発行所：中央公論新社

定 価：860 円（税別）新書版 284 頁



記者生活が長くなっても、忘れられない取材がある。

1998 年 4 月、僕は武豊騎手に話を聞いていた。質問は皐月賞を間近に控えた騎乗馬スペシャルウィークについてだった。

スペシャルウィークは乳母に育てられた競走馬だった。母馬のキャンペンガールは出産の 1 ヶ月前ぐらいから、お腹の具合が悪くなった。なんとか持ちこたえたキャンペンガールだったが、お産の当日、体調は急変した。注射を打ちながら、のちのスペシャルウィークを産み落とし、力尽きたように命を失った。

生まれ故郷である日高大洋牧場では、緊急事態に備え、乳母を用意していた。ばんえい競馬の競走馬として知られるペルシュロン種が育ての親になった。スペシャルウィークは乳離れするまでの約半年を乳母のかたわらで育った。

これは想像だが、牧場の人たちも実母を亡くしたスペシャルウィークを気かけ、よく面倒をみたはずだ。

こうした経緯を、武豊騎手も知っていた。「そうした育ち方が彼の性格を作ったのかもしれませんが。人を信用しているというか。」

スペシャルウィークは日本競馬の歴史を変えた大種牡馬サンデーサイレンスの 4 世代目の産駒だった。サンデーサイレンスは 1 年目からタヤスツヨシというダービー馬を送り出すなど産駒に抜群の運動能力を伝えた。その一方で激しい性格も伝えた。その性格がいい方に出れば闘争心に結びつくが、悪い方に出ればコントロールの難しい、わがままな馬になる。

そうした傾向を持つサンデーサイレンス産駒の中にあって、スペシャルウィークは異色の存在だった。従順な性格で乗り手のいうことをよく聞いた。高いレベルで「心技体」のバランスが取れていたスペシャルウィークは武豊騎手をダービージョッキーに仕立て、古馬になってからは天皇賞の春秋制覇、ジャパンカップ優勝を果たした。

楠瀬良氏の新刊『サラブレッドに「心」はあるか』（中公新書ラクレ）を読んでいる間、ずっとスペシャルウィークの逸話が頭の中を駆け巡っていた。

第 3 章の「強い競走馬をどうやって育てるか」の中に、子馬のおとなしさに関する調査のエピソードが紹介されている。筆者は放牧されている子馬たちの中に少数ではあるが頭絡を着けていないケースがあることに気づいた。調べてみると、そこにおとなしい子馬が育つ大きな原因を見つけることができた。

第 2 章の「勝つ馬と負ける馬を分けるもの」では、落ち着きのある馬ほど成績がいかどうかの考察がなされている。わたしは「パドックを見ても勝ち馬は分からない」と考え方をしている者だが、この本を読んでからはなるべくパドックに足を運んで出走馬の観察をするべきだと方針を転換した。

ものを言わぬ競走馬が発するボディランゲージ。それは本能から出た先天的なものであったり、育った環境によって得られた後天的なものであったりする。このボディランゲージをわたしたちはどのように受け止めればいいのか、楠瀬氏が著書の中でみせてくれる数々のエピソードが何よりも役に立つ。

偶然だが、楠瀬氏の著書を読んでいる最中にスペシャルウィークが死んだ。『サラブレッドに「心」はあるか』の発刊は、わたしの中で、スペシャルウィークの死と結びつき、忘れられない出来事になった。

（朝日新聞スポーツ部 有吉正徳）

書籍紹介

『馬のバイオメカニクス』

著 者：Jean-Marie Denoix

監 訳：青木 修

翻 訳：石原章和・高木真理子

発行所：緑書房

定 価：6,800 円（税別）A4 変型 190 頁



「編集委員長からの依頼，軽々しく引き受けるんじゃないかった…」。今，私は猛烈に反省している。なぜなら，この本で解説されていることを理解できないまま，この書評を書き始めざるを得なくなってしまったからだ。この本の著者は解剖学の専門家，Jean-Marie Denoix 博士。運動器や跛行診断のプロでもある。監訳は日本ウマ科学会会長の青木修氏。

言い訳だが，学生時代，私は物理が苦手だった。自分の目で見ても，確かに感じられるものについては，それなりに理解できていると思うのだが，見えないものを理屈で理解することは難しい。自転車が動く仕組みでさえ正しく理解していない。そんな私が，その何十倍も何百倍も複雑な，馬の体の中で起きている，筋肉や腱，骨の精密な動きを科学するバイオメカニクスに関する専門書について語る資格があるわけがなかったのだ。

とは言え，引き受けてしまったからには書かなければならない。理解することはこの際二の次と割り切って，とにかく文字を追ひ，図や写真を眺めてページをめくった。いろいろな筋肉がこれでもかと登場してくる。筋肉同士や，筋肉と骨がどのように連動して，馬の動きをつくりだしているのかが説明されている，ということはわかった。だが，その仕組みを理解するには至らなかった。

本書の特徴は，筋肉の作用や役割の説明にとどまらず，馬の動作と関連させて図解も添えて詳しく解説しているところにある，と監訳者の青木先生からレクチャーを受けた。それを踏まえて，再度，読むことにした。今度は「理解しよう」という気持ちで臨んだ。またも撃沈。本を見てみると何となくわかった気持ちになるのだが，実際に馬の動きをイメージしてみても，それがうまく重ならない。ただ，写真やイラストが多用されており，それが理解の助けになっていることは間違いない。

決して万人向けではないが，日本ウマ科学会会員の皆さんにとっては興味深い本であろう。特に，次のいずれかに当てはまる方は，この本を入手することをお勧めしたい。

- ◆ 馬の筋肉や動きに関して，基礎知識がある人。馬のバイオメカニクスについての知識・理解を深めることができるのと同時に，あなたがライダーやトレーナーだったら，日々の運動にそれを活かすことができるだろう。
- ◆ 基礎知識はなくても，チャレンジ精神旺盛な人，根気強い人。さらりと読んで理解できるほど，この本は甘くない。しかし，じっくり読んで，トピックを1つずつ攻略していけば，きっといつかは全体像が見えてくるはずだ。
- ◆ 馬に関する本のコレクター。これは，馬に関する専門書が少ないことが背景にあると推察するが，馬の本，とみれば蔵書に加えたい人には必須の1冊であること間違いなし。
- ◆ 青木先生のファン。何はともあれ，青木先生の著書，翻訳書は手に入れるべし。

最後に，私から青木先生に是非ともお願いしたことがある。それは，この本を持っている人を対象とした勉強会の開催だ。理解したいが，なかなか難しい，という人はきっと私だけではないはず。この本を余すところなく活用し，馬たちが良いトレーニングを受けられるようにするためにも，ライダーやトレーナーとともに勉強する機会をつくっていただきたいと切に願っている。日本ウマ科学会主催でそんな研修会を開けないだろうか？

（日本馬術連盟 北野あづさ）

Journal of Equine Science

Vol. 29, No. 2, June 2018

和 文 要 約

短 報

ウマ子宮胎盤組織におけるアクチビン受容体の発現——木村優希^{1,2}, 佐々木基樹^{1,2}, 渡邊謙一^{1,3}, Pramod DHAKAL^{2,4,6}, 佐藤文夫^{2,5}, 田谷一善^{2,4}, 南保泰雄¹⁻³ (¹ 帯広畜産大学獣医学研究部門, ² 岐阜大学大学院連合獣医学研究科, ³ 帯広畜産大学グローバルアグロメディシン研究センター, ⁴ 東京農工大学農学部, ⁵ 日本中央競馬会日高育成牧場, ⁶ 現所属: Animal Science Research Center, Division of Animal Science, University of Missouri, MO 65211, U.S.A.) 33

アクチビンは様々な生理活性を持ち、馬においては子宮腺から分泌され、胎盤形成および胎盤のホルモン分泌促進など、妊娠維持に重要な役割を担っているものと考えられている。本研究では、妊娠期の各ステージにおけるサラブレッド妊娠馬7頭の子宮胎盤組織における、4種類のアクチビン受容体 IA, IB, IIA, IIB の発現を、免疫組織化学的手法により検索した。子宮胎盤組織採取時の妊娠日齢は各々 88, 120, 161, 269, 290, 313, および 335 日であった。採取した組織を 4% パラホルムアルデヒドで固定し、連続切片を作成後、4種類のアクチビン受容体タンパクに対する抗体を用いた免疫組織化学的染色を実施した。その結果、子宮内膜上皮、子宮腺、栄養膜細胞、および子宮平滑筋において、4種類すべてのタイプのアクチビン受容体が妊娠期間を通して発現していることが判明した。以上の結果から、アクチビンは、馬の子宮胎盤組織において作用し、胎盤形成および妊娠成立、維持に重要な役割を担っていることが推察された。

日本在来馬集団における Y 染色体ハプロタイプの分布について——梶 裕永¹, 菊地美緒¹, 戸崎晃明¹, 廣田桂一¹, 永田俊一¹, 帆保誠二², 高須正規³ (¹ 公益財団法人競走馬理化学研究所, ² 鹿児島大学共同獣医学部, ³ 岐阜大学応用生物科学部) 39

近年、家畜ウマにおいて Y 染色体におけるハプロタイプ多様性が同定されている。そこで、日本在来馬集

団におけるこれまでの遺伝学的研究の補完的な情報を得るため、本集団における Y 染色体ハプロタイプの多様性と分布について調査した。8 在来馬集団から 159 頭の牡馬または騊馬（北海道和種馬 13, 木曾馬 37, 御崎馬 38, 野間馬 7, 対州馬 11, トカラ馬 16, 宮古馬 17, 与那国馬 20）を対象として、Y 染色体上の 5 遺伝子座における一塩基多型または挿入・欠失をダイレクトシーケンス法により決定し、ハプロタイプを同定した。その結果、Y-45288 および Y-50869 の 2 遺伝子座に変異が認められ、3 種のハプロタイプ JHT-1, JHT-2 および JHT-3 が観察された。これらは、世界中の品種に認められたタイプとそれぞれ同じものであった。木曾馬および御崎馬集団を除く各在来馬集団には JHT-1 が観察された。一方、木曾馬および御崎馬集団には JHT-2 のみが観察された。与那国馬集団において JHT-3 が観察されたが、これは JHT-1 の突然変異タイプであった。各ハプロタイプの地理的分布およびアジアの家畜馬の既報データから、日本在来馬の祖先集団における主要なタイプは JHT-1 であり、このタイプが現在の多くの集団に分布し固定していったと考えられる。各集団におけるハプロタイプの固定化は、各地域独自に生じた遺伝的浮動の影響や特定の父系の遺伝的影響を示唆している。これらの情報は、日本在来馬集団の遺伝的特徴に関する先行研究を補完するものである。

鰓性嚢胞に造袋術とポピドンイオジンとエタノールを用いた硬化療法を行ったアラブ種若雌馬の 1 例——Riccardo RINNOVATI¹, Barbara BIANCHIN BUTINA¹, Jessica BIANCHI², Armando FOGLIA¹, Carlotta LAMBERTINI¹ and Sara DEL MAGNO¹ (¹ Department of Veterinary Medical Sciences, University of Bologna, Ozzano dell' Emilia, BO, Italy, ² Private Practitioner, Pesaro-Urbino, 61121, Italy) 43

鰓器官遺残性嚢胞はまれに馬の喉部腫瘍を引き起こす。文献には 2 つの治療法が提案されているが、どちらも併発症が起こりうる。本報告ではアラブ種の 1.5 歳齢の雌馬の嚢胞での治療法（造袋術と硬化療法）

について述べる。診断は超音波画像とX線画像と内視鏡検査により行った。他の組織とは交通していない、低エコーの液に満たされた明瞭な包状構造を示していた。嚢胞を空にし、皮膚を嚢胞の周囲に縫合した。エタノールとポピドンイオジンを注ぎ、生理食塩液で洗い流した。手術から8ヵ月後、嚢腫の再発はなく、開口部は治癒した。 フェニベンダゾールの投与が馬の大腸細菌叢に与える影響 — Laura CROTCH-HARVEY^{1,2}, Leigh-Anne THOMAS¹, Hilary J. WORGAN¹, Jamie-Leigh DOUGLAS¹, Diane E. GILBY² and Neil R. MCEWAN^{1,3} (¹Institute of Biological, Environmental and Rural Sciences, Edward Llwyd Building, Penglais Campus, Aberystwyth University, Aberystwyth, SY23 3DA, Wales, U.K., ²Equine, Pets and Livestock Animalcare, Carmarthen, SA31 3RB, Wales, U.K., ³School of Pharmacy and Life Sciences, Robert	Gordon University, Aberdeen, AB10 7GJ, Scotland, U.K.) 47 駆虫薬は、寄生虫に対して使用される薬剤である。駆虫薬の標的となる生物への影響は知られているが、それらの薬剤が馬の消化管内の他の微生物やそれらによってもたらされる腸内代謝に与える影響は報告されていない。本研究は、ベンズイミダゾール系の駆虫薬であるフェニベンダゾールが大腸内に生息する生菌や原虫、主要な代謝について検討した。フェニベンダゾール投与群における糞便中の虫卵数は対照群と比較して多かった。2週間にわたる経時的な解析により、フェニベンダゾールとは関連のない経時的な細菌叢の変化が認められたが、検討したすべての項目においてフェニベンダゾール投与群と対照群の間に有意な差は認められなかった。この結果は、フェニベンダゾールの馬への投与はその標的となる寄生虫以外、腸内の微生物への影響が無いことを示唆しているとともに、その結果である腸内代謝の変化にも寄与していないと思われた。
---	--

臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習の DVD を販売しています。

<お申し込み方法>

以下の申込用紙をご利用いただくか、メールで事務局までお申し込みください。

<価格および代金のお支払い方法>

価格は1セット **3,000 円**（税込）です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行（9900）〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカカ^クカイ）

----- キリトリセン -----

申込用紙

ご希望の DVD と 枚数	(1) 2009 年（第 22 回学術集会）	Dr. Brooks	眼科	() セット
	(2) 2010 年（第 23 回学術集会）	Dr. Richardson	整形外科	() セット
	(3) 2011 年（第 24 回学術集会）	Dr. LeBlanc	繁殖	() セット
	(4) 2012 年（第 25 回学術集会）	Dr. Dyson	跛行診断	() セット
	(5) 2013 年（第 26 回学術集会）	Dr. White	急性腹症	() セット
	(6) 2014 年（第 27 回学術集会）	Dr. Scott	装蹄	() セット
	(7) 2015 年	Dr. Mama & Steffey	麻酔	() セット
	(8) 2016 年（第 29 回学術集会）	Dr. Ducharme	呼吸器	() セット
お名前				
ご送付先住所				
ご所属				
電話番号				
メールアドレス				

連絡先：日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676

e-mail：e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4 JRA 競走馬総合研究所

協賛団体名

団 体 名	〒	住 所
日本中央競馬会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル

賛助会員名簿

(五十音順)

会 員 名	〒	住 所
(株)アイベック	170-0002	東京都豊島区巢鴨 1-24-12 アーバンポイント巢鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	183-0024	東京都府中市日吉町 1-1 東京競馬場内
公益財団法人 ジャパン・スタッド ブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 6F
DS ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7 大阪丸紅ビル 10 階
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装蹄協会	111-0051	東京都台東区蔵前 4-5-9 O.T ビル 4F
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 7F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18
(株)ペティエンスメディカル	194-0022	東京都町田市森野 1-27-14 サカヤビル 2F

Hippophile 投稿に関する基準

(2013 年 4 月 1 日一部改定)

- ① 本誌の投稿は、Hippophile 投稿規程（以下「規程」という。）に基づくことを基本とする。
- ② この基準は、投稿者が投稿しやすいよう投稿分野ごとに細目を定めたものである。
- ③ 原稿を本誌の目的に沿ったものにするため、1～3名の審査員により審査を行い、事務局（(株)アイベック）を通じて投稿者と調整を行う。審査員の指摘を受けた投稿者は速やかに事務局に回答するものとする。その目的は、多種多様な本学会会員に対し、解りやすく美しい文章で、かつ投稿者の真意が正確に伝わる記事にすることにある。
編集委員（長）および審査員は、掲載の可否にあたっては、内容が特に営利目的でないもの、あるいは偏った個人批判、地域批判、団体批判を含まないものであることに留意する。
- ④ 本誌は、図表のカラー化を取り入れていることから、良好なピントや色彩を求める。
- ⑤ 本誌は、各号のページ数を刷上り約 40 ページとするため、投稿ページ数に制限を設ける。ただし、やむを得ない場合は、投稿者と協議のうえ、編集委員長がページ数を決定する。
- ⑥ 図は、写真を含めて図と称し、番号を付け、タイトルと説明文を付記することとする。その大きさは縦 6.0 cm × 横 8.5 cm とするが、説明文のスペースの関係から図 1 枚につき縦約 7 cm 取ることとする。ページ数の調整の関係で編集委員（長）の一任により図のサイズを決定することがある。
- ⑦ 投稿者は顔写真（カラー）と略歴（150 字程度）を添付することとする。
- ⑧ 刷上り最大 24 字 × 42 行 × 2 段 = 2,016 字の字数が 1 ページに印刷可能であり、これを目安に投稿することとする。
- ⑨ 図 1 枚の占めるスペースの字数は約 168 字となる。
- ⑩ 表にはタイトルと説明文のほか、必要に応じて注釈・解説文を添付することとし、表の大きさは、ページ数を考慮し、審査員と編集委員（長）が協議のうえ決定する。
- ⑪ 投稿者に原稿料（1 ページにつき 3 千円）を支払う。ただし、原則として研究論文や施設紹介には支払わない。原稿料は、刷上りのページ数により算出し、ページ半分に満たない部分は切捨てとする。ただし、5 ページ相当の原稿料（1 万 5 千円）を上限とする。
- ⑫ 投稿者は、原稿内容により、以下の各コーナーの分類について要望又は指定することができる。

総説：

【ウマの科学的分野における研究の総括と展望】

- ① 文献展望を主体とし、刷上りは図表を含めて 10 ページ以内程度とする。

科学論文・一般学術論文：

【ウマ科学に貢献する未発表・他の学術誌に未掲載の和文論文】

- ① オリジナリティーの高いもの。

- ② 科学論文は、研究目的、材料・方法、成績・結果、考察、纏めが適切に記述されている自然科学の論文とする。
- ③ 一般学術論文は、自然科学に準ずるが、馬の文化、経済学、芸術、歴史などの人文科学の論文とする。
- ④ 刷上りのページ数は図表を含めて 10～12 ページ以内程度とする。
- ⑤ 引用文献の書き方は JES の投稿規程に準ずる。本文中のナンバーリングは上付きとし、引用文献順に掲載する。但し、著者名の記載は 1 名あるいは 2 名までとし、3 名以上の場合は代表者 1 名を記載し「その他、あるいは et al.」として記載する。

馬事往来：

【馬との関わりについての提言、レポート、エッセイなど】

- ① 馬の文化や科学の実態を会員が相互に理解しておく必要性のあるもの。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて 3 ページ程度とする。

馬事資料：

【馬に関連する資料の掲載】

- ① 日本の馬事資料として保存しておく必要性のある内容のものを掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて 3 ページ程度とする。

特別記事：

【馬に関連する競技会やイベント、利用実態などの記事】

- ① 馬に関係する各種催し物や活動状況などを紹介。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて 3 ページ以内とする。

馬事施設紹介：

【馬の文化・科学に関わる施設の紹介】

- ① 日本の馬事文化、研究、教育、乗馬等に関わりのある施設などの紹介記事。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて 3 ページ以内とする。

学術集会記事：

【馬に関する学術集会における講演内容等の掲載】

- ① 本学会の学術集会等を主体に掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて 3 ページ程度とする。

関連研究会記事、その他：

- ① 規程に準じて取り扱う。
- ② 刷上りのページ数は 1～2 ページとする。
- ③ いずれのコーナーにも該当しないものにあつては、編集委員長が新たにコーナーを設けることができる。

投稿原稿送付先

Hippophile 編集事務局宛に e-mail もしくは郵送でデータを送付のこと。（投稿された原稿は返却しませんので予めご了承ください。）

e-mail: hippo@ipecc-pub.co.jp

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-12

(株)アイベック内 Hippophile 編集事務局

編集後記

今年の日本ダービーはディープインパクト産駒のワグネリアンが優勝しました。2着はオルフェーブル産駒、3着はキングカメハメハ産駒。すべて歴代の日本ダービー優勝馬の子供たちでした。日本ダービー馬は日本ダービー馬からと言っても過言ではないでしょう。ディープインパクトのもとには海外から毎年複数の繁殖牝馬が種付けのためにやってきています。そうして生まれた子供たちのなかから、今年は日本の皐月賞にあたる英国2,000ギニーの優勝馬が出現しました。今や日本の競馬は世界のサラブレッドの育種選抜の場の一角になったと言えるでしょう。編集子が馬の仕事をはじめた40年前に想いをはせると、まさに隔世の感を禁じ得ません。ひるがえって馬術の競技用馬にも国際的に活躍できる馬を日本で生産しようと志す動きもあります。時間はかかるでしょうが、40年前の日本競馬のことを考えると決して不可能とは思えません。

さて本号は、昨年日本ウマ科学会で開催されたシンポジウム「日本の馬の歴史と利活用からみた将来展望」の特集です。シンポジウムでは日本の馬飼養の歴史を踏まえ、荒川由紀子さんにさまざまな馬の利活用の可能性について各地の事例を含めて総合的に論じていただき、続いて日本在来馬について藤田知己さんに、また、山下大輔さんには内国産乗用馬の将来展望について解説いただきました。さらに日本で飼養頭数の最も多いサラブレッドの、競走生活を終えたあとの利活用について、角居勝彦さんと木口明信さんにお話しいただきました。そして最後に局博一さんが総括をされました。すべて再録してありますので、学会に参加できなかった方も、日本の馬の将来について考えていただければと思います。

書籍紹介は2冊。1冊はヒポファイル編集委員長の著作です。決して役得で掲載したわけではありません。またもう1冊は日本ウマ科学会会長が監訳された書籍です。これも別に会長への付度というわけではありません。それぞれお読みいただければ幸いです。会員の皆様におかれましては馬に関する書籍を刊行されたときにはご一報ください。是非紹介させていただきたいと考えています。

(編集委員長 楠瀬 良)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail: e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 73, 2018

2018年6月発行

<http://jses.equinst.go.jp/>

編集委員長: 楠瀬 良

発行者: 青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキュウ)店

当座預金口座 539393

口座名: 日本ウマ科学会(ニホンウマカガクカイ)

印刷者: 株式会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067